

ことばを、切々にさけびつづけて追ひ慕つた。

大津の町へかゝつた。

町の者たちは、

「狂人、狂人」

と、眼をそばだてた。

その狂人について走つてゆく九之助も又狂人としか見えなかつたに違ひない。

武家は膳所の藩士であつたとみえる。大津端れの屋敷町へかゝると、程なく宏壯な門前で駒を

止めた。

——まさか？ ともう武家の頭になかつた雲水が、突嗟に、門内へ入りかけた武家の足もとへ

身を投げて両手をついたので、

「呀っ……まだ？……」

と、呆れたやうな面をして——そしてすぐ前にもまさる怒氣をふくんで罵つた。

「執念ぶかい賣僧め、これ以上つき纏ふと、用捨せぬぞっ」

「ご無理もござりませぬ」

雲水は、動かなかつた。

『大藏經開版の資金を勸化するため、諸國の路傍に立ちましてからはや十年にも至りますが、か

やうにまで、御迷惑なお纏りを致したことはござりません。——けれど、先刻も申しあげたやう

に、けふこそは、今年の第一番の御寄進に會ふ日ぞ、この大業に佛陀の加護もあり給はゞ、あは

れよき人に會はせ給はれと——心に念じてある所へ、あなた様の御通過だつたのでござります

る。いはゞ、あなた様こそ、佛陀がことしの第一番に、わたくしへ引合はせて下されたお人でお

ざる。——そのお人にして、まつたく微塵の佛心なく、世に對しての菩提もなく、石にひとしい

お方ならば、止むを得ないと申すほかござりません。——けれど萬が一にも、叩けばひゞくお心

の扉もあつて、少しなりとも、世を益し、末代の人の幸に、現世の一文半錢の費えでも割いてや

らうといふお志のあるお方であつた時は、今日、あなたを引き合はせて給はれた佛陀の御試し

に對して、わたくしは此の大業を成す資格のない者でござりまする。——敢て、尊財のうちから

若干を下されなど、額を申しあげるわけでもありません、一文半錢でもよろしいのであります

又、金錢の御喜捨をお厭ひなれば、一帖の半紙、燃えさしの蠟燭の缺け、お雑巾に下げる檯檮な

りとも有難いのでござりまする。執こいやうでござりまするが、末代大業の精神の文化のうへに、

御喜捨の襪履も光りとなり、蠟燭の缺けも赫々と世のあるかぎり役立つのでござりまする』

雲水のひとみは、武家の心をうごかした。雲水の雄辯なことは、たゞ雄辯に過ぎない者の言葉とはまつたく違つた力を持つてゐた。

「……失禮いたしました」
突然、武家はかう云つて、自分の傲然としてゐた態度を改めた。

「何やらすこし御坊の云ふことが分つて來た心地がする。寒さをしのいで、一刻もはやくわが家に、心の急いでゐた途中とて、前言の不禮はゆるされい」

「なんの、わたくしこそ、自己の一心にのみ走つて、御迷惑を顧みず、狂氣沙汰と思し召されても御無理ではございません」

「して——お恥しいがそれがしには知識を缺くが、御坊の云はれる大藏經開版とは、いつたい何ういふもので、又どういふ聖願なのであるか」

「大藏經は名のごとく佛教の大叢書でござりまして、數千卷にもほる大部なもの。支那では、宋の時代に版行され、暹羅、西藏、朝鮮國などでも企てられました。皆その國の政府の力を

もつて成され、民間の資力ではとても出來ない程なものでござります」

「わが日本國でも、佛教渡來以後、宋版大藏經の請來があり、寫本も行はれ、一部の名刹の秘庫には納められました。その出版は行はれず、堀河天皇の御宇と、鎌倉の世の頃、計畫はありましたが、いづれも成功を見なかつたやうな次第でありました」

「……ウム。」
「——降つて、寛永から慶安にわたる約二十年間にかけて、將軍家の資力と、天台僧正の督勵によりまして、刻成せられましたのが、世にいふ寛永寺版大藏經でござりますが、それとてわづか三十餘藏も印刷いたしましたのみで、各々名山の寛塔ふかく秘藏されてしまひ、民間のものがこれを閱覽いたさうとしても、望み得ない事になつてをります」

「ああ、さういふ物か。……それでほど分つた」
「——もう少しお聞きください、わたくしの發願までを」

「オ、聞きたい、聞かしてください」
「衆生教化のやくめを遂げるこそ佛者の使命とぞんじます。衆生の文化のすすむと共に、汚濁は

世に渦まき、人間の苦界はいよいよ苦界となつて参りますのに、佛教はたゞ高き山に、伽藍堂塔の輪奐の美を見せてゐるばかりで、すこしも苦界汚濁の中に役立つては参りません。たとへば、大藏經のごときも、千年でも五百年でも、たゞ寶塔のくら闇の中に、蝕ませてあるといふ有様」雲水の面には、現在の佛教にあきたらないでゐる公憤がみなぎつて見えた。

彼は、自分の肉體が、雪の上にあることも忘れ果て、語つた。

佛教は山の上で静止してゐるものでないといふ事だつた。烈しい動きと流れにある地上の文化に、民衆の精神のうへに、寺院の光は映してゐないといふ嘆きだつた。

大藏經を暗黒におく。暗黒の中におく大藏經は、死藏經といつてもいい。

あの老大な文字を民間に持たしたら、それだけ民間の文化に益するものを。——かう彼がさけ

び——さけぶばかりでなく實行に着手したのは、寛文初年で、

|| 大藏經開版化縁文

といふものを書いて、世間へ發表した。

彼は、噴はれた。

宗門の者は猶、こぞつて、

(無謀な大望)

だと云つた。

けれど、彼にも、勵ましてくれる者があつた。それは、彼の師事してきた宇治の黄檗山の開祖 隠元禪師だつた。

隠元は、自分が日本へ渡つてくる折、故郷の明國から携へてきた方冊大藏經を、原本として彼に與へ、又、黄檗山の地内に一倉を建て、そこを版木倉として提供してくれた。

それに力を得て、彼は、京都附近に、版を起す印刷の工房を持つた。そして、自分の弟子の寶州といふ者と、如空といふ者の二人に、そのはうの仕事はまかせ、自身はこの大業の資金を得るために、諸國の講壇に立つたり、街道に立つたり、家々の門に立つたりして、もう十年に近い歳月を闘ひとほして來たのである。

彼とは——こゝ迄假にたゞ雲水と呼んで來たその人は——肥後熊本の生れで、隠元、木庵などについて禪道を究め、宇治黄檗門の高足と今では仰がれてゐる鐵眼禪師の事なのである。

四

九之助は、ふた晩の間、犬のやうに屋敷のまはりを彷徨つて、その門内へ、主人の武家に伴はれて入つたきり出て来ない鐵眼禪師のすがたが見えるのを、根氣よく待つてゐた。

雪のあの日——

九之助は、塚の陰で、鐵眼のはなしを終りまで聞いてゐた。

いつのまにか、それから彼は、死といふものを忘れてゐた。

禪師が出てくるのを待つてゐるのは、もう「死の道」を訊かうといふ爲ではなかつた。生きる道！

それが訊ねたいのだつた。

仲間が出て来たので、走り寄つて様子をきくと、雪の日、汚ない坊さんが奥へ上つたが、病氣が起つたらしくお屋敷で寝かしてある。然し主人がていねいに看護してゐるから熱は高いがまもなく癒るだらうといふ話——

九之助は、何を拜んでいゝかも知らなかつたが、たゞ宇宙へ掌をあはせ、

(どうぞ、禪師の生命をおまもり下さい)

と一心に祈つた。

それは、自分の生命を祈る氣もちだつた。

——雪解も乾き、陽もあたたかな春を誇り出した朝、ちやうどあれから六日目か七日目だつた。

「ありがたう御座いました」

門を出て、門へ禮拜してゐる禪師のすがたを、九之助は見つけた。

すぐ——走り寄らうとしたが——あの雪の日の話を聞いてからのせわか、その風采に、何か近より難いものがあつて、つい悔々と、町を離れる迄、黙つて居て行つた。

「禪師さま——」

思ひきつて、九之助は聲をかけた。大津の町の屋根が下に見える關の山の道だつた。

「なに」

と、鐵眼は、無雜作に返辭して、又無雜作に云つた。

「なんか、御用か」

いきなり突きつめた聲をして、九之助は、鐵眼のわらちの前にひれ伏した。

「わたしに、生きる道を教へてください」

しばらく黙つて鐵眼はさういふ九之助の萎びた體を見てゐたが、
「生きるにもいろ／＼あるよ、蠅、蛆、蚤、牛、豚、猫。そなたも、分相應に生きてゐるやうぢやないか」

「——死なうといたしました！ 何度も、何度も、けれど死ねないのです」

「見たやうな所があるなう、おまへ様」

「弓茶屋で……はい、あなたが財布をお失くしなされた晩……」

「ム、ウ、さうだつた」

「禪師さま、私を——お弟子にしてください。死ぬ氣で、教へて戴きます」

「なにを」

「生きる道を」

「ばかな！」

見向きもしないで關の山へすた／＼登つてしまふのである。

ぐたつと、九之助は地にへばりついてゐた。やつぱり、死ぬほかないかと思ふ。蠅、蛆、牛、豚、猫——そのうちの自分は何れに相當するだらう——牛以下かも知れない。猫以下かも知れない。

い。

ふと九之助は、雪の日の鐵眼のすがたを思ひ泛かべた。途端に彼は人間を自認してゐたのであらう、起ち上つて、霧つしぐらに山のうへへ、禪師の影を慕つて入行つた。

蟬丸堂のうしろで、大きな笑ひ聲がきこえた。そのほかに、がや／＼人間の聲がしてゐた。焚火をかこんでゐたこの山の乞食たちの群れに割りこんで、鐵眼が、屈托のない顔つきで、話しこんでゐるのだつた。

五

鐵眼のはなしを聞いて、乞食たちは、親しみをあらはしながら、押揃つてゐた。

「ぢやあ何だ……おめえつちとおれたちたあ、いは／＼同商賣みてえなもんだね」

「さうぢや、さうぢや」

鐵眼は、ちがふと云はなかつた。

「今まで、ずるぶん貰つたらうな」

「あ、いたゞいた事もいたゞいたが、まだなか／＼足らぬ。大坂難波の月江院で、初めてわし

が大藏經開版の願ひを壇のうへで説いた時は、どこの誰とも知らぬ人から、千兩の御寄進があつた。千尺の高閣も一石より……と云ふてな」

「え、千兩」

乞食たちは、この世の話でないやうな顔つきをした。

「ついでこの間も、路傍で、見知らぬ尼さんが、二百兩、喜捨なされた。さういふお人を見出すことに、この世の罪業汚濁は末代も盡ないだらうが、同時に、この世に光明を廣らして住んで下さるお人も盡きない——と自信ができてな、その時のうれしさと云つたらな」

「それやあ、嬉しいだらうな、二百兩もくれる人があつたら。——だが、おら達は、どうしてそわな人と打つかねえのだらう」

「は、は、それは打つかりこないよ、百年お菰をして歩いても」

「たつた、これだけの違ひだよ。おまへ方は、おまへ方自身のために袖乞ひしてゐる。わたしには、わしが無い。……わしがもらふわけぢやない」

「ぢや、誰が取るのだい、それを」

「文化が……ではちと難かしからうな——この國の人々がみな生活のうへに、何かの俸をうける働きをするものがだ」

「お坊さんは先刻から、しきりと、大藏經開版とか何とか云つてゐるが、つまりそれだね」

「あゝわしの場合」

「いつたいそれはどんな物だい——」

「こんな物と一口には云へないが、さつと云へば——と、鐵眼はわかりよくその事業の必要を説明してから、

「今——隱元禪師が、黃檗山にお建てくださった版木倉は、北藏南藏と二棟あつて、合せて百五十坪」

「そんなに何を入れるのだね」

「書物を刷る版木ばかりぢや。その版木といふのは、横二尺七寸、たて八寸、厚さ五分。大藏經全部に要するその版木のかすが、さつと六萬枚ほどで、それも裏表兩面に版を刻してゐるから、その文字の面積を平たくなると七千二百坪になる」

「ふう……ム」

「版木一枚は、ちやうど一升のお米が炊けるほどな木材だから、ひとり前一日五合として、それで御飯を炊くとすれば、十二萬日のお米を炊くことが出来、その日かすを年に換算すれば三百三十年近くになるから、ちやうど建武中興の後、楠正成が討死して、諸國が又みだれ初めたあの頃の年から今日の寛文年間まで毎日一人の生命をつなぐだけの飯米が炊けるわけぢや」

「おどろいたなあ。……それぢやお金がいるわけだ、それをお坊さんは、一人の力でやる氣かい」

「ひとりで出来るものか、みんなでやるのだよ、わしはたゞそれを勸化といふ、すゝめて歩くだけだ」

「幾額ぐらゐから貰ふことにしてゐるかね」

「一文から、紙一帖から」

「そんなら、おれたちも寄進しようぢやねえか、一文や三文なら、おれたちにだつて出来る。」

「かたじけない、お前方の一文は、富者の千兩にもあたる。そして、その功力を富者も平等にうけるのだが」

蟬丸堂の陰でそれを見てゐた九之助はどうしてこゝにはこんな美しい世の中があるのかと異つた。

おくみの住んでゐる世の中、小牧台八の振舞つてゐる世の中、そこもこゝも一つ地上であるのだが――

彼はふたゝび、そこから程近い雜木林の小道の中で、鐵眼禪師の袂をつかまへた。しがみついて放さなかつた。――これを放しては絶対に生きる道のない眸で。

横町の女

幅一尺、長さ五尺ほどの白地の布を、竹竿なりに細長い幟旗として、それへ筆太に、

震動飄雪ノ瑞アリ

と上に書き、下へは文字を小さく二行に削つて、

五百羅漢

造立勸化

と誌してある。

元禄初年ごろから、こゝ数年のあひだ、江戸にこの旗を誰か見ない日はなかつた。

「――五百羅漢造立！ 五百羅漢造立の願望に合力してくだされ」

勸化僧は呷鳴つてあるく。

「——松雲さんが来た」

と誰ももう知つてゐた。

一合の米、五勺の油、零細な錢——。松雲は、いちく／＼といねいに叩頭して行く。

彼の顔は、生々してゐた。彼の肉體には誰も驚くやうな、根氣と、健康があつた。

(よくつゞきますねえ)

なぐさめて、人が問ふと、

(希望がありますからね)

と、明るく笑ふ。

もう四十を越えてゐるらしい年頃。

——それが、京都六條の佛師屋のせがれ九之助だつた。

鐵眼禪師は、もう數年前に、大藏經開版の偉業をこの世にのこして、世を去つてゐた。

——その弟子、九之助の松雲は、師の鐵眼ほどな力のない事を知つてゐたが、鐵眼が生きて行つた道だけを、せめて習はうとした。

師を失つて後、松雲はふたゝび孤兒のやうな寂し味を抱きながら、諸國の山川や禪刹に、修行を求めてゐるいた。

そのうちに、豊前中津の城下から數里入つたところの香開窟山に、五百羅漢の完全な古像を發見して、

(さうだ、わしは佛師の家に生れてゐる。佛像なら自分で彫る手がある)

——佛敎の功力を山から地上へ——と常に云つてゐた鐵眼のことばを思ひあはせて、

(——分相應におまへも生きてゐるぢやないかと、先師が天津の山で仰つしやつた。さうだ、これならばわしの分相應を)

それが彼の動機だつた。

然し、その發願の芽を生ませたものは——彼はひそかに——弓茶屋のおくみだと思つてゐる。

生きつゞけてゆく限り、おくみの事は忘れられなかつたのである。禪は自力聖道だつた、苦行道だつた——おくみとの闘ひであつた。

松雲は、一生のうちに、自分の手で五百體の佛像を彫るといふ一願を立てて、それへ眞向きにならうとした、おくみの記憶に打ち克たうとした。

震動飄雪ノ瑞アリ

この旗の文字は、自分で書いたのであるが句は鐵眼が何かの折に、彼に示した語なのである。

(雪の日、雪の日！)

黙つてあるく時は、それを心に思つてあるいた。口をひらく時は、

「——五百羅漢造立の勸化をふれ申す。これは宇治黄檗山の末僧にござりますが、都座の中に、五百體の佛姿をそなへたい誓願をたて、御府外の龜戸村に、公地千五百坪をたまはりまして、一刀三禮、やがて成就も見えさうになつて参りました。有縁有情のお人々、あはれ、御合力たまはりませ」

今日も、聲を暖らしながら、淺草の裏町を歩いてゐた時だつた。

「——お坊さま——」

露路の陰から呼び止めた女がある、その聲走りが、びーんと耳につき通るやうだつたので、松雲はハツと思つた。

振向くと、髪を手拭でつまみ、襟垢のついた着物を恥るやうに、俯向いて、顔を見せずには寄り寄つて來た女が、

「御合力いたしまする」

と、何か柔かい——紙につゝんだ絲のやうなものを、ぱさりと、彼の手へあづけて逃げるやうに横丁へかかれてしまつた。

「……あつ、おくみさん」

松雲は駈けだした。

——もう見えなかつたのである。彼はその後で、手に持たされてゐるものを凝と見つめてゐた。

思ひ出させる何ものゝ香ひも艶もすでない——それは白つぼく瘦せてゐる一にぎりの黒髪だつた。

「？……。わしに心の芽を生みつけてくれた女だ」

松雲はあわてゝ法衣の袖で眼を横にこすつた。

そして、十歩ほど駈けもどつて行き、そこへ抛り捨てゝ來た旗竿をいそいで拾ひ上げた。

雪のあした

雪の 後

北がはの屋根には、まだ雪が残つてゐるのであらう。廂の下から室内は、廣いので、灯がほし
らほど薄暗いが、南の雀口に、わづかばかりつよい陽の光が廻ね返つてゐた。きのふにつよして、
終日、退屈な音を繰りかへしてゐる雨だれの無聊さをやぶるやうに、地面へ雪の落ちる音が、時
時、ずしんと、十七人の陽にひびいた。

太平記を借りうけて、今朝から手にしはじめた潮田又之丞が、その度に、きらつて、書物から
眸を離すので、そばに坐してゐる近松勘六が、

「雪ぢやよ」

低聲でさゝやいた。

「赤穂も、今年は降つたかな。」

富森助右衛門がつぶやくと、

「なる、十郎左」

三、四人おいて坐つてゐた大石瀬左衛門が、前かどみに、磯貝十郎左衛門の方を見て、
「——雪で思ひでしたが、もう十年も前、お國元の馬場で、雪といふとよく暴れたなう」

「うむ」

十郎左は、笑くぼでうなづいた。

「この中でも、いちばん年下ぢやが、そのころのお小姓組のうちでも、やはり、貴様がいちばん
小さかつた。そして、泣き蟲は十郎左と決まつてゐたので、貴様の顔ばかり狙つて、雪つぶてが
飛んで來たものだつた」

「泣き蟲なら、もつと、涙もろい先輩がをるよ」

「誰」

紙捻で耳をほつてゐた赤埴源藏が、

「よせ、あの話は」

友達は、みな知つてゐることゝみえて、同じやうにくすくす笑つた。

こんなふうには、時々、和やかにくづす謹嚴な無聊さを、それでも、この部屋の若者たちは、隣室の方へ、気がねらしく、笑つてはすぐ憚るやうな眼をやるのだつた。

ちやうど、下の間にはこの九人。

上の間に八人。

ふた組に別れてゐた。

その上の間の組には、大石内藏助以下、老人が多く、けふは料紙と硯を借りて、手紙を書いてゐる者が多かつた。いちばん年長の堀部彌兵衛、顔の怖い吉田忠左衛門、黙つたきりの間喜兵衛、そのほか原惣右衛門だの、間瀬久太夫だの、眞四角に膝をならべて、讀書か、何かしてゐた。

内藏助だけは、斜めに顔をあげて、いつもの深謀な眸も、今はもう何も思ふことがないといふやうに、ぼんやり、半眼にふさいでゐた。書き物もせず、書に手をふれず、何つちかといふと小がらで肩のまろい體を、やつと、置くべき所へ置いたといふやうな恰好で、居すまひよく坐つてゐた。

十二月十六日――

人々は、手紙の封に書いてゐる。

討入のおと、ひの夜は、もう過去だつた。何だか、遠い過去の氣がするのである。ゆうべは雨だつた。

吉良殿の首を、泉岳寺の君前に手向けてから後、松平伯耆守の邸に直訴して、公儀の處分を待つたのである。その結果、一同四十六名を、水野、松平、毛利、細川の四家へわけて御預けと決つたのは夜で、雨の中を、まるで戦のやうな人数に警固され、この白金の中屋敷へ、内藏助以下十七名が送りこまれたのは、すでに丑滿だつた。

意外だつたのは、こゝへ着いて、をとゝひからの泥装束を脱いでゐる混雜のなかへ、五十四萬石の自身である越中守が、自身、無雜作にやつてきて、

(この度は、さだめし、本望なことであらうの)

と、ねぎらはれたことだつた。

次には不廢番の物々しい警戒だつた。今朝になつて、それとなく訊くと吉良家とは、唇齒の家がらである上杉彈正大弼の夜襲に備へるものと判つた。

内藏助は、

(上杉家には千坂がをる)

一笑したが、若手のある下の間では、
(いや、何ともしれぬぞ。)
と、なほ胸の餘燼を、消さなかつた。で——雪とは承知しながら、ずしん、ずしん、と地ひびきのする度に、湖田又之丞も、ほかの者も、すぐ眼をうごかした。

眼 皺

表役との境は、混雑してゐた。

家老の三宅藤兵衛は、大廊下の角で、十七士接伴役として、細川家の家中から選ばれたうちの一人である堀内傳右衛門をつかまへて、

「なに、あの者達へ、火鉢を與へる？……。以てのほかなー」と、たしなめてゐた。

「火鉢はおろか、公儀のお預け人、あの衆と、雑談なども、かたく無用でござる」

傳右衛門は、物頭役で、藤兵衛よりはすつと末席だつた。老人といふほどでもないが、小鬘には白髪がみえ、温良な眼皺のなかに、親しみぶかい眸をもつた人物だつた。ふだんは、上役の者

へ、逆らつたことなどはない性格だが、まさしく、彼の顔に不平ないろが燃えたので、藤兵衛はまたいつた。

「料紙視だけはゆるしたが、風呂の事、掃道具の事、醫藥その他、簡條にいたして公儀へ、お伺ひ中ちや。必ずと、勝手な處置、相ならぬぞ」

「心得ぬことを……」

傳右衛門は、吃つた。

「なにが心得ぬ」

「御家老には、あの衆を、たゞの囚人とでも思し召してか」

「お預けの罪人、囚人に相違ながらう」

「罪人」

傳右衛門は、眼に涙さへもつて、心外さうに、

「武士は勿論、お臺所の御用に至る町人や、お坊主の端くれまで、義士よ武士道の花よと、世間を擧げて、賞めをりますあの衆に對して」

「だまんなさい。罪は罪」

「御家老は」

「だまらぬかつ。私情をもつて、御法を紊しなどしては、天下の御政治は元より、一藩のしめしがつかぬ」

「武士の情を知らぬおことば。傳右衛門は、服しかねまする」

「服さぬ」

「はいつ」

「服さぬといつたな」

「申しました。申さずにはをれませぬ」

「これ、傳右、傳右。……貴公よのお年をしながら、巷の人氣などにぼつぼつとしてはいかぬぞ」
「そんな、輕薄な存念とお考へあることが心外ぢや。今の世相をご覽あれ、武士道がどこに、君臣の義がどこに、武士の賢い道は、祿から祿の多きへつき、金を蓄へ、妾をかぞへ、遊藝三昧、人あたりよく、綺羅の小袖で送るのが一番ぢやといふ風ではござらぬか。——そのよい手本が吉良殿と内匠頭殿のいきさつぢや。赤穂の浪士たちがした事は、御主君の仇をうつたのみか、腐れきつたこの世相と人心の眼を醒ませたものと傳右衛門は考へまする。それを、たゞのお預け人

と、同視なさる心底が、歎かれますわい」

「困つた熱病ぢや。とに角、火鉢などは相ならん」と後へ、幾つもの箱を運んで来て、立ち淀んでゐる納戸の小侍たちを睨めつけて、

「元へ戻しておけつ」

と、叱つた。

ふだんの傳右衛門とは、まるで別人のやうに、

「いや、かまはぬ。もしお咎めを受けた時は、傳右衛門が腹切つておわびするまで。通れつ」

「ならぬつ」

「御家老も接件役のおひとりではないか」

「さればこそ、落度のないやうに計るのぢや。傳右ひとりの腹切つてすむことならよいが、お家にもかゝはる」

「あの衆の心事に、武士が、涙をそゝがいでは、いよく武士道は地に廢る。傳右は、生命にかけて接件を勤めまする。——御家老とはいへ、無慈悲なお扱ひには服せませぬ」
「これや、傳右が、どうかいたしたわい。火鉢は、納戸へ返せつ」

「かまはぬ運べつ」
「だまれ。上役の命を」

十七士のゐる廣間まで、二人の大きな聲は、がん／＼聞えて行つた。一同は、等しく耳をすまして、ゆうべから見覺えてゐる堀内傳右衛門といふ細川家の一家士に對して、心の底から持ちあげる感激を顔へいつばいにしながら俯向いてゐた。

すると、程なく、何の事もなかつたやうな傳右衛門の顔が、にこやかに、そこにみえて、
「そこへ一つ、その邊へ一つ」

と、納戸の者をさしつして、火鉢をすすさせた。金網のかゝつてゐる大きな唐金の火鉢である。それへ、紅殻染の小布圍をかけさせた。

ことばになど現はし得ない氣持と——傳右衛門の身にかゝる咎めを氣づかつて、みんな、黙つて首をさげてゐた。

ゆうべ、一番さきに、彼と懇意になつた富森助右衛門が何かのことから、内藏助殿はあれで冬はとても寒がりやなので——と話したのを記憶してゐて、この計らひをしてくれたのだらう。好意どころか、生命がけの接待なのだ。一同は、火の暖かさよりも、傳右衛門の心に胸が熱くなつ

た。

「これで、夜に入つても、いくらかはおしのぎようござらう」
傳右衛門は、満足さうに、

「——わけても、大石殿はの」と、柔和な笑顔を送つた。

内藏助は、遠くから、
「傳右どの」

いつばいな感謝が、その眼ざしと、その一禮とで相手の心に映つた。
「お氣持は、頂戴いたした。然し、公儀の御斷罪を待つ私共……身に餘りまする。お火鉢は、何とぞお退けおきを」

「はゝゝ。聞えましたな」

「助右衛門が、いらざる無駄ばなし、寒さなど、とやかう申す境遇ではござらぬ」

「御心配くださるな。唯今、上役と口争ひはいたしたが、ちやうどそこへ、越中守様から、明日は御一同へも、精進をさし上げいといふお汰沙が下つた。殿様御自身、明日は、愛宕神社へ、御

祈願に参られますさうな。……お判りであらう。……火鉢などは、問題でない。藤兵衛もそれを聞いて、二言とない顔。もう一切、お氣づかひ無用ぢや。さ、いさゝかながら、細川家の心づくし、あたつて下さい、くつろいで、あたつて下さい。』

紫

接待役は、十九名ゐた。交代で非番をつくり、その日は、夕刻から家に歸つて、休養することになつてゐた。

堀内傳右衛門は、町住居だつた。いつも馬で、若黨に仲間をつれ、高輪から細川家の上屋敷に近町まで、わが家の寢床を思ひなが、緩慢な馬蹄の音を楽しんで戻るのだつた。

夕方の箱屋溜り、牛曳き、居酒屋、往來のどこへ耳を傾けても、今、江戸の話は、赤穂浪士の讚美でもちきつてゐる。傳右衛門は、それらの話をきくと、自分の名譽みために欣しかつた。

また、義舉の反映が、貧しい層にほど強く浸みとほつてゐるのを知つて、若黨へ、

「世間は、底の方ほど、頼もしいものぢや。赤穂の衆を見ても、大石殿はべつちやが、大野、奥野、千石どころの重臣に、節操のある奴はをらぬ。義士の多くは、みな輕輩ぢや。肉食者いやし

むべしと申すが、武士道は、上層になくて、下層にある。世の中を淨化する力も、國を支へる力も、支權者には無うて、無力な下層の方にあるといふは、妙な話ぢやぞ」

と、馬上からいつた。

年暮の松や竹も、眼に映らないのである。辻や、橋の畔で、人だかりを見ると、

「落首だらう、讀んで來い」

と、駒をとめた。

若黨の佐介が、走つて行つて、

「見て参りました」

「なんとあつた？」

「——細川や水のながれは清けれど……」

「ふむ」

「たゞ大甲斐の隠岐ぞにされる」

「は、あ、町人共の勘は、怖いものぢや。義士の御預けをうけた四家のうちでも、細川家と水野家は、情ある取扱ひをしてゐるが、毛利、松平の二家は、冷遇ぢやといふ噂がある。さてこそ、

その諷刺であらう。はは、い、い、やりをるの」

傳右は、會心の時にやる獨り合點を繰返して。

「やりをるやりをる」

と、駒を、金杉橋へすゝめた。橋の上へ立つと、寒い潮の香と千鳥がそこらの川口から吹き上げた。

「はてな、今日も——」

そこで彼が、眸を、反対な河岸へ反らした。

木枯らしに吹かれて、女は二つの長い袖を胸に掻きあはせてゐた。戸ざした施米小屋の蔭に立つてゐるのである。寒々と、袂の先や、裾がうごいた。そして、遠方からでもすぐ眼の中へとびこんで来るやうな江戸紫の布を、たたりと頭巾にしてゐた。

どこか淋しい影のある顔だちだつた。若くて、水の垂れるほど美しい姿が、片鶯のやうに、悄然と、枯れ柳の下に凍つたまゝ、傳右衛門が橋を渡りきるまで、じいと、見送つてゐるのだつた。

「どこの娘？」

傳右は、鞍つぼの上で、考へた。

町家の女ではなく、身装やもの腰は武家の娘である。然し良家の子女が、ひとりであんな場所に佇立んでゐるのはをかしい。

數へてみると、傳右衛門は、その江戸紫の頭巾を、これで何度見てゐるか分らなかつた。

白金の中屋敷の近くでも一、二遍、札の辻あたりでも——またこの金杉橋では今日でもう三、四度。

或時は、はつと、用ありげに眼を惑はせながら、そのくせ、近づいて来る氣ぶりはなく、いつも濡れてるやうな眸を投げて佇立んでゐるきりだつた。

「品よく見せてはゐるが、娼婦かも知れぬ」

さうも、考へられた。

どぎつい元祿の風俗、華美な女、世相に浮いてる油のやうな表皮は、すべて輕薄なもの、腐敗をつゝんだものと、傳右衛門はきめてゐた。

「お歸り遊ばしませ」

式台には、いつも通り、妻の磯女と娘のお麗とが、指をついて迎へた。お麗の笑顔や、貞淑な

妻のそれを見るだけで、もう彼の疲勞は忘れてしまった。

家庭にあつても、彼はむろんよい父であり、よい良人だつた。行きとどいた調度や掃除にも、何不自由ない平和さがみえた。

が——ちと不機嫌に、

「修蔵は、また、留守か」

食膳につくと、すぐ訊ねた。

お磯が、晩酌の一盞を酌しながら、

「書物を買ひにといつて出ましたが……」

「書物を。——書物など、讀んだこともないに。——また、境町の芝居町でもうろついてゐるのぢやらう」

「いえ、このごろは、よく御教訓を守つて、道場の方も、勵んでをりまする」

「なんの、道場通ひが、あてにならう。お前など、そんな淺はか故、若い者の行狀が分らんのだ。道場の門弟仲間と、悪所へ行くらしいといふ噂を聞いたぞ」

「まだ、江戸が珍しいのでございます。友達に強ひられて、見物ぐらゐには參つたかも知れませ

ぬが」

「さう庇ふからいかん」

傳右衛門は、苦りきつた。

國許の親戚の眼が、この春、江戸へ上せて寄越した若者だつた。堀内家のあと目をつがせ、お麗に夫あはすに足る若者は、江戸の人間や都會の風に染まつた在番にはないといつて、剛健をもつて誇る國許の熊本から選んだのである。二、三年ほど、手許において勉強させ、よかつたら、決めようといふ相談の下に預かつてゐた。

戸田修蔵といつて、國許では秀才だといつてよこした親戚の添狀どほり、頭もいゝし、人品も、お磯の氣に入つてゐた。それだけに、修蔵は早く江戸に同化した。一度、風呂屋遊びに行つたことが、傳右衛門の耳に入つてから、すつかり信用がなくなつてゐた。

「まづ、あれも駄目ぢやの」

杯を、きばと、膳にふせて、

「あんな柔弱者なら、江戸にいくらでも、次男坊や三男坊の口がある。何もわざわざ」

ふすまが開いた。

娘のお麗が、飯びつを寄せて坐つたので、傳右衛門は、口をつぐんでしまった。

「お父様、ご酒は」

「たくさんちや」

「ご飯になさいますか」

「む……む……貰はう」

黙々と、飯を噛む父の顔つきを見て、お麗は話題をさがすことに努めた。

「お父様」

「なんちや」

「けふ、露月町の研師が、この間お渡ししあそばした十振の刀のうち、祐定と、無銘と、二本だけを仕上げて参りました」

「さうか」

「その時、刀屋も不審がつてをりましたが、どうして、あんなに澤山の刀を、一時に研がせるの
でございますか」

「今にわかる」

「でも合戦もないのに」

「武士にとつては、常の日も戦の日も、けぢめはない」

「そして、あの刀屋は、面白いことを申しました」

「なんといふて」

「御主人様には、この度は、赤穂浪士の接伴役とかにおなり遊ばして、まことに、お羨ましくございますと……」

「ふむ」

傳右衛門は硬ばつた顔を解いて初めて、いつもの笑みをたゝへた。

「代りを」

と、飯茶碗をだして、

「はゝゝ。わしの役目を、羨ましいとか」

「刀屋ばかりでございせん。呉服屋の番頭も、花道の師匠様も、出入りの八百屋までが、義士たちのためなら、どんなことでも盡したい。身代りになつても上げたい。——それのできる御主人様は、お羨ましいと申すのでございます」

『至誠は人をうつ。……そんなかなう』

『その代り、うるさいことも訊かれて困ります。大石内藏助様は、どんな顔だの、堀部様はどうだの』

『は、い。見たいのぢやな』

『いちばん困るのは、御處刑は、どう決まるであらうと、私に訊いたら判るかとても思ふて、探るのでございます』

『何事も知らぬといふておけ』

『でも世間の衆は、よると觸ると、どう裁くか、わが身のことのやうに案じてゐるので、時には、側で聞いてゐても、涙がこぼれることもございます。……ほんとお父様どう決罪るのでせう』

『わからぬ』

『遠島ぐらゐでございませうか』

『さあ』

『やはり、死罪でせうか』

『何とも、まだ』

『死罪でも、打首か切腹か、磔刑か』

『いふな』

傳右衛門は、首を振つた。

『——お裁きは、御政道ぢや。將軍家や關老方の慎重なるお考へにあること。われ／＼などが口にするのでない』

だが、すつかり機嫌はなほつて、傳右衛門は、やがて、のび／＼と、安息の寢床に入つた。

彼が、眠りかけると、

『修藏様、お歸り』

と玄關の方で、お磯とお麗との聲がした。

——歸つたのかな？

傳右衛門は、さう思つたが、修藏の部屋に、人の入つたらしい聲音はしない。

『は、あ』

と、傳右衛門は覺つてゐた。

案の定、夜が更けてから、裏庭を開けて、そつと、寢所へ寢足が消えこんだ。それが、修藏だ

つた。

「ちッ……」

と、彼は寝返りをうつた。

田 作

細川家の優遇を通して、世間のうはさだの、身寄りの消息だの、またその後の上杉家の態度などが分ると、十七士は、爲ることもなく、一日まじに、藩の接待役と、親しみを加へて行つた。傳右衛門は宿直だつた。

廣間の方で、あまり愉快さうな笑ひ聲がどよめくので、彼は、夕刻、お臺所の方からそつと取り寄せておいたごまめの醬油煮に唐辛子をかけたのを、蓋物に入れ、のこくと出向いて行つた。

「おう、お賑やかなことござるの」

「やあ傳右殿か」

「傳右殿、こゝへござれ」

下の間の若者たちは、べんがら染の炬燵ぶとんを中心にかたまつてゐた。傳右衛門は、自分の

息子たちを見廻すやうに、眼をほそくした。

「いつも、お元氣ぢやの。——何か面白い話でもござつたか」

「あるわ、まあ、お坐りなされ」

飄逸な、片岡源五右衛門がいつた。

「——今の、近松勘六めが、惚氣をいふた」

「それは近頃、珍らしいことぢやの。して、どんな惚氣？」

「江戸詰の頃、他藩のお留守居と、ともに吉原とやらへ参つて、ひどう、妓にもてなされ、歸されないで、弱つたことがあるといひをる」

「は、い。この勘六殿がなう」

と、その勘六のそばへ坐つた。炬燵の温みが、あい／＼と和氣をた／＼へて、傳右衛門は、自分で若やく気がした。

勘六は、討入の時、吉良方の猛者と出會つて、泉水に落ち、その時、小手に怪我をしたので、白布で左の腕を首に吊つてゐた。

頭を掻いて、

「嘘、嘘」

「二言をいふぞ、傳右殿が來たと思ふて」

「は、は、は、」笑ひながら、一人が、傳右衛門のそばにある蓋器を見つけて、

「これは何ぢや」

傳右衛門は、蓋をとつて、

「偶に、かような茶うけも、よからうかと存じて」

「ほう、田作ぢや」

「なに、田作」

と、一同は首をのばして、

「よからうどころか、これは珍品」

「お一つ、おつまみなされ」

赤壇源藏が、毒味といひながら、一つ摘んで、

「これやおつたぞ。唐辛子がきいてをる。——いや、ちと利きすぎる」と眼をこすつた。

「美味しい、香ばしうて」

「源藏に涙をこぼさすなどは、おつな田作ぢや」

案内評判がいゝので、傳右衛門は欣しかつた。すると、沈黙してゐた上の方から、吉田

忠左衛門が、

「傳右衛門。其許は、若い者が好きで困る。ちと、老人組の方へも、お話しにおいで下され」

「いや、これは失禮」

と、傳右衛門が、眞面目にうけて、田作の蓋器を持つて立つたので、二間とも、くづれるやうに笑つた。

その聲に、眼をさましたか、同じ色のべんがら色の炬燵とんに、横顔を當てゝゐた内藏助もふと、顔を上げた。

堀部彌兵衛は、眼鏡を外して、

「耳よりな肴、こちらへも、ちと、頂戴しておきたいものぢや」

「さ、さ、どうぞ」

「わしも、酒の折に」

小野寺十内は、うやくしく、懐紙をだして、四、五匹の田作をそれへ取り頒けて包んだ。間瀬久太夫は、箸で掌へとつて、むしやく試みながら、

『なる程、これは結構。久しぶりで、惣菜らしい物を食うた』

むろん、何気なく出たのだが、久太夫のことばに、一同は、はつとしたやうだつた。死を待つ國法の罪人に、過分とも、何ともこれ以上は、好意の表現がないほど、優遇を盡してくれてゐる細川家に對し、また接待役の家士に對して、今のことばが、ちよつとでも、不平とひゞいては申し譯ないといふ氣持が、期せずして、誰の肩にも、びりつとうていたのであつた。

だが、傳右衛門は、そんな神經は持ち合せてゐないやうに、むしろ、さういつて貰つた事が欣しい顔つきで、

『ほう。ひどくお氣に召されたの。てまへも、非番の日は、ちと、晩酌をやりますので、上戸の舌は、わかるとみえる。——だが、田作の唐辛子煮など、餘り失禮物故、どうかと思つて——』

すると、内藏助が、

『傳右殿』
炬燵ぶとんを退けて、靜かに、眞四角な膝を前へすゝめて來たので、傳右衛門は、こゝへ來る

と、つい、寛いでしまふ自分を、急に、引き緊めながら、

『はつ、何ぞ？』

と、べつな返辭をした。

内藏助は、いひ難さうに、

『まことに、吾儘らしい申し出でござるが——』

『はつ』

『われ等、永年の浪人暮し、粗衣粗食に馴れて參つたせむか、御當家より朝夕頂戴いたしをります二汁五菜のお料理は、結構すぎて、ちと重うございます。匹夫が贅に飽いたかの如き、勿體ない申し分でございますが、以後は、一汁一菜か、二菜、それも、ちさ汁、糠味噌漬などの類にて、仰せつけ下さるやう、お膳番へ、お頼み申しあげます』

彌兵衛、惣右衛門、十内なども、尾についていつた。

『さうぢや、さう願ひたいの』

『實を申すと、毎日の御馳走には、少々、參つた形でござる』

傳右衛門は、笑ひだした。

『それでは、最良のひき倒しといふやつでござるの』
『さう／＼、それに、書見のほか、殆ど身動きもせぬ體ぢや』
『所が、二汁五菜は、太守のお聲が／＼りでござれば、これや一存で減らすわけにはゆかず……。それに加へて、御臺所はいふに及ばず、料理人共は、何でもかでも各々方に欣んでいたゞきたいと。腕によりをかけ、必死に、美味しい物をと作りますので――』
『いやあ、愈々弱る』

『ちと、お體を動かすことが出来ればよろしいが、それだけは、公儀のてまへ。……定めし、外氣にも、飢ゑませうの』

沈黙家の奥田孫太夫が、隅の方から初めて口を出した。
『毎晩、足の土踏まずが、かさ／＼して閉口でござる。われ等、今は何の慾もない。裸足で土がふみたくござる』

『ご尤もぢや。御當家はお庭も廣し、品川の海も一望。近火のせつは、各々を庭へ集める御規則故、火事でもあれば、庭を、御案内いたさうものを……』
しんみりと、傳右衛門はいつた。そして、

『オ、御時計が鳴つた。お寢みなされ』

と立ちかけたが、また戻つて来て、

『――申し忘れたが、明日より、お奥の役者の間に、大工どもが入りますが、兎事ではござらぬ故、お氣にかけぬやうに』

と、斷つて、詰所へ退がつた。

小屏風が、幾つも取り出された。

内蔵助は、茶色のちりめん頭巾をかぶつて上の間の床脇へ寝るのだつた。下の間は、寢つきが早く、すぐ静かになつたが、上の間では、咳の聲がなかく絶えない。

潮田又之丞は、寢入ると、齒ぎしりする癖があつて、よくからかはれた。一番老年で、ことし七十六歳になる堀部彌兵衛老人が、或夜、

『えーいつ。えーいつ』

ふた聲、寢言で人を斬るやうな氣合をかけたので、若者部屋の者が、がばつと、總立ちに起き上つて、夜半に、大笑ひをしたこともあつた。

厠に立つほか、晝間、何もせぬ體であつても、夜はやはり眠ることが楽しかつた。御預けの身

になつて、二、三日の間は、嘘をつぶると、白い雪と、双とが、ちらついて仕方がないと誰もが同じことをいつたが、次には、やがて来る死に對して、深刻に、考へるくせがついた。若い人々ほど、それを考へた。老人は、同時に、自分の生涯の出来事から死までを、毎晩、繪本でも繰るやうに憶ひだし、咳聲のやむのと同時に眠つた。けれど、ほど絶つと、もう考へる問題が何もなくなつた。死は、白い紙を見るやうに當り前な觀念になつた。——床に入つて寝つくのが、誰も早くなつて、すやくと十七人の寢息がそろつた。そして、その一つ一つの小屏風のうちへ、四家の大名に分れて同じ境遇にある我が子や、友や、また故郷の母や、兄弟が、夢になつて、こつそりと、忍びこんだ。

十郎左

朝。

あゝまだ俺は生きてゐる。

陽を見ると、誰もさう思つた。ゆうべの夢を話す者はなかつた。

よほど、欣しいことがあるとみえて、傳右衛門が、にこ／＼顔で、何か抱へて来た。

「御一同、今日から、お煙草のおゆるしが出ましたぞ」

これは、確に、福音だつた。

こゝにゐる者、殆んどが、煙草すきだつたが、太守の越中守は煙草嫌ひで、禁煙は、藩風のやうになつてゐた。——それを、傳右衛門はどうかして殿の許可を得て来たのである。

接客用の提げ煙草盆、見事な蒔繪で、青磁の火屋がはいつてゐる。煙管をそへて、上の間と、下の間へさし出し、

「備へおくわけには参りませぬが、ご所望の時には、いつでも、さし出します。さ、十分におすひ下さい」

「は……」

何かしら、肅然として、皆うつ向いた。多感で、實篤な奥田孫太夫は、眼をしばたゝいてゐるし、堀部老人は、後を向いて、鼻紙を鳴らした。

「さ、さ、どうぞ」

「御好意に甘えて、大石殿から先に参らせませう」と原惣右衛門が、推しいたゞいた。暫くの間、ゆるい、紫いろの煙が、上の間からも、下の間からも流れた。

『今年も、暮れますのう。』
早水藤左衛門が、煙のゆくへを見ながら話した。
『されば……』

と、傳右衛門は、何かいひかけたが、口をつぐんで、ふと、奥の物音にかういつた。

『大工がはいつて、お騒がしうござらう。その代り、初春は早々、あちらの役者の間へお移りができます。こゝは、暗うござるが、あちらなれば、庭も見え、空も見え……』

と、いひかけて、

『源藏殿、どうなされた』
體を、無性に掻いてゐた赤垣源藏が、

『小槍ができましたな。痒うてたまらぬ』

『それやお辛うござらう。なぜはやく仰つしやらぬ。典醫に申して、塗り薬をとつて來て進ぜよう』

立ちかけると、

『傳右殿、傳右殿、おついでに、十郎左へも、一服、お遣はし下されませ』

と、誰かいつた。

『十郎左殿も？』

と見まはすと、その中では、一番の年少者で眉目の清秀な磯貝十郎左衛門が少し、青白い顔して、片手で腹を抑へてゐた。

『御病氣か』

『いゝえ、少々ばかり』

十郎左は、首を振つた。

そばの者が、

『尾籠でござるが、十郎左は、下痢氣味なのでござる。兩三日、我慢いたしてをりますが、お手當を』

『なぜ、我慢などなさる。左様に、お親しみ下さらぬと、傳右めは、殿のお心持を、十分にお取次ができません。役目の落度と申すもの。どうか、もつとお心易く、用事を仰せつけ下さらぬと困る』

『これから、氣をつけまする』

叱られたやうに、十郎左が、眞顔で謝まつたので、側のもも、傳右右門も笑つた。十郎左は、顔を赧らめて、少年みたいにもぢ／＼した。

朝夕、世話をしてゐるせゐか、傳右衛門は、今ではまつたく、この人々を、他人とは思へなくなつてゐた。とりわけ、この磯貝十郎左衛門には、一番年少者であるせゐか、自分の子みたいな愛着があつた。——ふと、胸の中で、一人娘のお麗の顔と、十郎左の顔とを並べてみたりした。

「一年といへば、熊本からきた修藏めと、何歳の違ひもないに」と、思つた。

また、或夜のつれ／＼に、堀部老人から十郎左の身上話を聞いたことも手傳つてゐた。何でも十郎左は、十四歳の時は堀部老人の推舉で、内匠頭の小姓に上つたのが奉公の初めで、浪士のうちの多数は、輕輩でも、二代、三代の重恩をうけてゐるが、十郎左などは、君家には、極めて、御恩の浅い方で、復讐に加盟しなくとも、誰も、誹る者はない位な位置であつた。それが、江戸へ出ては、前原伊助などと共に、町人姿となり、吉良家の内部へ出入りして、一番至難な役目とされてゐた密偵の役目を完全に果たしたといふのである。

その、密偵の仕事のうちでも、最も、探り得なかつたのは、吉良上野介の寢室の位置だつた。

討入を決するまでに、どれほど、それを知ること、同志の者が、苦心したか、想像のほかだつた。——それを、つひに、突きとめて、味方に、

「よし」

と、最後の準備をさせたのも、十郎左の殊勳だと聞いてゐるし、その夜、堀部安兵衛と裏門にまはつて、得意の槍をふるつて駆け入つた武者振やあの討入の騒動の中で、吉良家の飼人をとらへて、蠟燭に灯をともしさせた落着ぶりも、十郎左の性格そのものだといふ。

また、吉良の首をあげて、泉岳寺へひき揚げてくる途中、金杉橋までくると、内藏助が、十郎左をさし招いて、

「ちよつと、母の顔を見てこい」

と、いつたが、かぶりを振つて、十郎左は行かなかつたといふ話や——それらが、いつとはなく、特に、傳右衛門が彼を好く原因にもなつてゐたには違ひなかつた。金杉橋から、たつた一足の將監橋の裏長屋に、十郎左を、目の中に入れるほど可愛がつて育てた母の貞柳が、ひとり住んでゐるのを、内藏助は、知つてゐたのである。——非番の日に、そこを馬で通ると、傳右衛門はよく、

「この邊だな」

と、思ひ出す話でもあつた。

だが、朝夕、かうして同じ屋敷に暮しながら観察してゐると、十郎左は、美貌だし、なで肩だし、一體、どこにそんな剛氣がかくれてゐるのか、不思議に思へた。——今だつて、側の者が、下痢だといつたのを、まるで、處女のやうに、緘くなつて、羞恥むのである。

——男が惚れる男だ。

傳右衛門は、つい、じつと見つめてしまつた。お麗の姿を、彼のそばに描いて……。『どれ。それでは、典醫を連れてまゐらう。その方が、早からう』

一つの青春

正月になつた。

松の内が過ぎると、閑老や世間のおひだに醸されてゐた「赤穂浪人御處置」の問題は、俄然、表面化してきて、世人は、その議論に熱した。

評定所の十四人衆から、閑老へさし出した意見書の眼目は、

浪士助命説。

だつた。赤穂浪人の擧は、君臣の美德を高揚したもので、これに、死を興へることは、道徳に死を興へるも同じである。また、赤穂浪人の行動は、御條目——武家諸法度の作法を一點も紊してはゐない。だから、徒黨の暴擧ではないといふのだつた。

それは、民間の輿論と、殆ど同じ氣持だつた。將軍家すらも、内心、御同意といふ噂がある。だが、強硬な反對説もあらはれた。

多くは、學者である。學府の中でも、最高の權威者、荻生惣右衛門はまつ先に、浪士死罪。を主張した。理由は「法」の尊嚴である。寸毫、犯すべからずと迫るのだつた。

幕府は、義と法の重さに迷つた。老中の意見も二分するし、こゝに、上杉家といふ白眼で見てゐる一派もある。

だが、世間は輿論をあげて、浪士の助命を信じた。殊に細川家などは、台所役人から、太守まで、殺したくないので、胸がいつばいだつた。太守自身、神にまで、祈願した程であるから、情熱的に、

「助かる」

「助かりませう」

と、いひあつた。

で、ひそかに、

御赦免となつた時。

——遠島に處せられた時。

——死罪の時。

三つの場合を豫想して、急場に、まごつかない準備をしてゐた。

傳右衛門などは、殊に、十七士が細川家に永預けになる場合は、當然お召抱への沙汰があらう

し、また、時服と同時に、大小の入用はきまつてゐるから、その時に役立つやうにと、秘蔵の古

刀、新刀十本を、疾くから刀屋へ手入にやつて、獨りで、澄ましこんでゐた。

「梅が咲いたの。——あの衆に、はやく、晴々と、今年の花を見せたいが」

もう、一月の末。

その日も、非番で、傳右衛門は自宅へ戻る所だつた。

金杉まで来ると、若黨が、

「あれ、旦那様、また」

鞍つぽへ寄つて、主人の袴を引いた。將監橋の上に、くつきりと、濃い紫、白い顔が、見え

た。

「ウーム、氣狂ひぢやらう」

「この邊でも、さう申してをりまする」

「若いなう」

「怖い程、美しい女で」

「不憚な……。ちやうど、お麗と、同い年くらゐではないか」

「お嬢様と申せば、お嬢様も近ごろは、どこか御氣分がすぐれぬやうに存じますが」

「そちの眼にも、瘦せたとみえるか」

「ちと、御血色が」

「うむ……」

歸ると、けふは修藏もゐた。お麗や母と、顔を揃へて出迎へた。

機嫌がよい。

然し、修藏には、餘りものもいはず、晩酌がすむと、すぐに寢室へ入つた。
かなり眠つたつもりだが、近くの太鼓は、まだ夜半には早かつた。といつても、家人は皆、床についたはずなのに、裏庭で、物音がする。戸……登音……。

「修藏だな」

直感に、首をあげて、

「このころは、だん／＼遊び上手になつて、わしが寝かけてから、抜け出しをる。よし、今夜——」

提げ刀で、雨戸を開けた。

母屋の裏から、速い人影が、庭木のなかへ隠れた。傳右衛門は、とび降りて裸足のまゝ、そこへ駈けた。

「誰だつ。——盗賊か、修藏か、これへ出さう」

する／＼と、襟がみをつかんで、ひきすり出すと、

「あつ、おゆるしを」

「修藏だの。……こらッ」

「……………」

「卑怯者、顔を上げい。……何ぢや、何ぢや、その懐中から落して隠したものは。見せろ」

「あつ、こればかりは」

修藏は、両手で懐中を抱へた。その肩を、傳右衛門は思はずかつとして蹴つた。お麗の大事にしてゐる手筒が、轉がつた。銀の平打だの、べつ甲の櫛だのが散らばつた。

「や……娘の」

こめかみに、青白い怒りを走らせて、傳右衛門は、修藏の襟がみを掴み直した。

「おのれ、淺ましい奴。娘の部屋から、遊びの代に、これを、盗みをつたな。盗賊の所業ぢや。

この、盗賊めがッ」

「お父様つ……………」

ふいに、彼の足もとへ、お麗が走りよつて泣き仆れた。

「私が、上げたのでございます。修藏様に」

「な、なんぢやと、……貴様が、修藏にやつた？」

「はい、どうしても、お要用だといふお話なので」

「たはげ者つ！」

額から、嗚りつけて、

「母をよべつ。——お磯つ」

「はい……」

後に來て、悄然としてゐた。

「お前も、お前だぞ！よう聞けつ、この馬鹿娘が、この遊蕩兒に、遊びの代を、買いでをるのぢやつ。——貴様つ、母として、なぜそんなことに氣づかん。不行届き千萬なつ」

「お詫びいたします。まつたく、私の……」

「生ぬるいつ。そんな詭言で済まうか。そちと、お麗の糺命は、後でする。——まづ修藏だ、手を離して、

「修藏、出て行けつ」

「……」

しゆくつと、お麗が泣いたのに誘はれて、お磯も、修藏も、涙をながした。

「見るも、けがれだつ。おのれのやうな柔弱武士に、赤穂の衆の爪でも煎じてのませたら、少しは人間らしい魂にもならうか。ちつとは、世間で、あの衆の噂もその耳に聞くであらうに、呆

れかへつた大馬鹿。——いや、いや、もう何もいふまい、即刻熊本へ歸れ」

「申しわけございませぬ。まつたく、同門のお友達と、近頃、酒をのみ覺えまして」

「いひ譯がましいことを申すな。行けつといつたら、行けつ。——これお磯、笠と草鞋、それに路銀をつかはせ」

「あなた……」

「早くいたせつ」

「でも、あまりといへば」

「今宵ばかりは、庇ひだて、一切ならぬ。わしは、苦々しい我慢をけふまでしてゐたのだ。そちが出さねば、わし自身、笠、草鞋を背負はせて掴み出すぞつ」

いひすてると、傳右衛門は、風呂場で足を洗つて、寝てしまつた。

翌る日、出役の間に、

「修藏めは、出て失せたか」

「はい……。不愼ではございますが、仰せのやう……」

母と娘は、悄然と答へた。

敦盛

二月に入つて、二日の晩だつた。傳右衛門が、ちらと、用事に姿をみせると、上の間から、
「オ、よい所へ、傳右どの、これへ」
珍らしく、内藏助が、呼ぶのである。それも、いつになく、ほがらかに。
見ると、酒が出てゐる。

甘藪の赤壇源藏、吉田忠左衛門、堀部老人、小野寺、間瀬の人々は甘みぞれを飲んでゐた。無
言居士の奥田孫太夫までが、今夜は、ひどくニコ／＼してゐるのだつた。

「お杯を下さるとか」

傳右衛門が坐ると、

「されば。——十郎左、その杯を、傳右殿に」

「は」

酌ぐと欣しげに、

「十郎左どの、杯ちやの」

傳右衛門は、平して返した。

十郎左は、手を振つて、

「もう、参りました」

「磯貝、卑怯」

と、下の間で、近松勘六がまけんだ。

傳右衛門は、手をのばして、

「これはいかな事。酌した、杯、取らぬ法やある」

「でも、今宵は、飲べ酔うてござります。傳右殿、ゆるしませい」

と、廊下へ逃げた。

内藏助は、笑ひながら、

「いや／＼、十郎左は、あのやうな優男でござるが、酒は、した／＼かに飲みますぞ。傳右殿、

お逃がしあるな」

「返せ、敦盛」

傳右衛門は、戯れながら、たうとう、彼を捕へて、罰杯として、大きな杯でのました。十郎左

は、覆へるやうに、坐つて、

「討死」

と、いつた。

「まだ、ちと、早」

早水藤左衛門が、腕をすくつて、

「もう一獻」

「おいぢめなさるな。もう……もう……教盛は、この通り、首さしのべた」

「そんな弱い、十郎左ではない。よし、よし、飲まねば、あのこと話すぞ」

勘六や、瀬左衛門は、面白がつて、

「さうく、のまねば、あのことを、傳右どの、お耳に入れよう」

「何ちや、それや聞きたら」

十郎左が手功ばなし、吉良殿の寝間を探つた一件ちや」

「それや、聞いた」

「いや、それに絡んでの話ちや。堀部殿は、まだ、みんなは話してをられぬのちや。傳右殿、聞

きたうないか、十郎左は、色男でござる」

「いけない。謝る」

十郎左は、あわて、

「それだけは、勘辨せい。飲む……飲む……。その代りに、傳右殿、あしたは又、御典醫を、お

ねがひ——」

「いや、飲んで貰ふより、その話、聞きたうなつた。何でござる、十郎左殿の手功ばなしに絡む

事とは」

「知らん、知らん、眞言秘密と申すなり」

「は、見ろ、十郎左が、あの困つたらしい顔を」

そんな、賑やかだつた前の晩を忘れ去つたやうに、翌る日の三日は、皆、せつせと、故郷や知

己へ、手紙を書いてゐた。ことに、内藏助、小野寺十内など、長文で細字に、半日も、筆をねぶ

つて、煙草の所望も出ないのである。

「はてな」

傳右衛門は、いつもと違つた人々の眉宇を感じた。

と、夜になつて、上屋敷から使者が来た。沈痛な夜氣が詰所にみちた。浪士の裁決はついたのである。幕府の内意が、その日、四家へ向つて發しられたのだ。四十六名、切腹。

「……だめだつたか」

傳右衛門は、詰所から立つ勇氣も、口をきく勇氣も失つてしまつた。

同時に、

「あゝ偉く」

沁々と、肚の底でいつた。——考へてみると、正月は式日が多い。二月一日は、日光のお鏡開き、これも式日だ。それが過ぎれば間もあるまいと——自分よりも先に、洞察して、ゆうべは別れの酒を、けふは、各々、死の身仕度をしてゐる内藏助以下の人が、づんと、目の前の露を掃つた連山のやうに見直された。

越中守の傳言で、それを、ことばで傳へるには、あまりに冷たい。明日の朝は、床の間に、花を挿けようといふことだつた。——罪人の室に花、それで分る。

「あの衆に、花を見せる日が来たか……」

傳右衛門は、その花瓶を出しながら、人間の作つた法といふものを考へた。

用事が終つてからも、行くに堪へない氣がしてゐたが、やはり、心にかゝつて、ちよつと、浪士たちの廣間をのぞくと、もう、上の間も下の間の人々も、半分は、床に入つて寝んでゐたが、大石瀬左衛門、富森助右衛門、近松勘六などは、起きてゐて、

「オ、それにお出でたは傳右殿とお見うけ申す。お入りあれ」

「もうはや、お寝みでござらうに」

「いや、ちとお目にかけていたものがござる。——ほかでもないが、吾々共も、やがて程なく、この世の埒も明かうと存ずる。お禮と申すも、今更らしい。お暇乞ひに、こゝで藝づくしを、御覽に入れよう」

小屏風を持ちだして、その蔭で、助右衛門と勘六が、隆達の節を真似て唄つた。瀬左衛門は、眞面目くさつて、堺町の歌舞伎踊りを踊るのだつた。

屏風の蔭から、二人のお尻が突き出てゐるし瀬左右衛門が澄ましこんで毛脛を出して踏む足拍子も、をかしかつた。みんな笑つた。傳右衛門も、腹の皮がよれた。涙をこぼしながら、笑ひかけた。

十郎左は、床に入つてゐたが、腹ばひに首を上げて、
「困つた大人共でござる。傳右殿、あしたは、その手鞆に、灸をすゑておやりなされ」と。いつ

た。
「長まつてござる。したが、十郎左殿、そこ許の腹のぐあひは」

「上天氣」

「は、い、上天氣」

「あすの日和も——」

「つゞきませう、よい春ぢや。いや、お寝みなされ」

「お寝み……」

「傳右殿、お寝み」

「お寝み」

ひとり残らずいつた。

琴の爪

翌日の四日は、非番に當つてゐた。傳右衛門は、一刻でも長く詰所にゐたかつたが、時刻が來たし、交代の同僚も見えたので、悄然と、中屋敷を退がつた。

眼のふちに、うす黒い肉が、たるんでゐた。馬の上でも、彼は、一言もものをいはなかつた。

「やつ、修藏様が」

若黨が、口走つた。

札の辻の往來から、修藏の影が、露路へ走りこんだのを、傳右衛門は見つて見ぬふりをして通つた。もう、とうに江戸にはゐないはずの彼だつたが、草鞋などもつけず、いつもの身装で、まだ何處かに身を寄せてゐる様子だつた。

——歸つたら、糺命してやらう。お磯がよくない。どこかに置いて、も一度、詫をさせて家に

入れるつもりだらう。
漠とした彼の頭には、それすら、それ以上には考へられなかつた。唯、ゆうべの隆達ぶしの聲、

踊りの毛脛。そして、涙をこぼして笑つたことなどが、錯然と、頭にあつた。
すると、ふいだつた。走つて來た女だつた。
悲鳴のやうな聲で、いきなり、

「殿様つ……。殿様つ……。お慈悲でござりますつ」

もつれて、何をいふのか、咄嗟だし、馬が蹄を狂はせたので、聞きとれなかつた。たゞ、傳右衛門には、自分の鎧へ、ひしと、しがみついてゐる黒髪と、白い顔と、そして、もう眼の中になで、沁みこんでゐる濃い江戸紫の布が、解けて、肩から胸に垂れてゐる凄まじい女の姿を、はつと見た。

「狂女め！」

若黨が、横から、突きとばした。

わつと、仆れた途端に泣いた女の髪は、生涯耳から滑えまいと思はれるやうな叫びだつた。

すぐ、橋のそばの番屋から、人が駆けて來たので、幸ひと、傳右衛門が駒をすゝめると、絹を裂くやうな聲が、後で聞えた。そして何者かと、前へ廻つて、傳右衛門の駒の口輪を、がきつと抑へた。

「何するツ」

「わしちやつ」

見ると、同僚で、同じ接伴役の林平六である。

「傳右殿、すぐ引つ返せつ」

「やつ、御上使か」

「たうとう來たつ」

「あつ……今日……今日」

傳右衛門は、夢中で、鞭を振つた。

すでに、十七士の部屋は、静だつた。最後の食事をすまし、各々、越中守の贈り物、白の小袖に、淺黄無垢の袴をつけ、足袋、帯などをつけてゐる所なのである。

傳右衛門は、詰所と、そこと、廊下と、また上使と檢死役のひかへ間とのあひだを、うる／＼してゐた。

「いけない！ 見苦しい」

自剃して、詰所で、がぶ／＼水をのんだ。

前日、豫告があつた代りに、上使が來ると急だつた。尤も、人数が多い。黄昏れ前に、終らなければならぬ。

越中守も、ひそかに、お成りだ。大書院にをられるらしい。庭には白い幕、白い屏風。——傳

右衛門は、眼をそむけた。

廣間を見ろと——

すらすと、同じ白と残黄の死装束が、すどやかにならんでゐる。彼の熱い眼に、さうして、平然とゐる人々が不思議だつた。眼で、人々は、傳右衛門に別れをつけた。傳右衛門の眼は、それに答へるのすら、あぶなげなものを、いつばいに、たゞへてゐた。

すると、一人が、

「傳右殿、今日は、別して、御馳走になりましたが、まだ、煙草が出ませぬな」

「おう、唯今」

細川家の者は、みな、死なぬ者が、うはずつてゐた。煙草盆を持つてきた小坊主は、原惣右衛門に、頭をなでられて、泣いてしまつた。

料紙、硯が出る。

辭世。

書く者もあり、書かぬ者もある。

その間に、傳右衛門は、やつと、人々と別れがいはた。いろ／＼な傳言を、彼は、書きとめた。

内蔵助とも、最後の聲を聞きあつた。

「十郎左殿には、何か……」

十郎左は、につこり、首を振つた。

やがて、時刻。大石内蔵助の名が先によばれた。彼の姿が、庭先の、白屏風のかげに隠れると、しいんと、眞夜中よりも静かな一瞬が來た。——異様な音が、ばすん——と聞えたと思ふと、人の面に、さつと、青白いものが走つた。

「——内蔵助殿、お仕舞ひなされました。吉田忠左衛門殿おいでなされ」
庭で、役人がよんだ。

それから、順々に、最後の大石瀬左衛門の切腹が終つたのは、もう夕方——庭は屏風と幕だけが、暮残つてゐた。

傳右衛門は、もう、自分が悪鬼か人間か分らなくなつてゐた。人々の遺品や、脱いだ物を、各、札をつけ、番號をつけて、空虚な部屋の隅に、積みかさねてゐた。

と——覚えのある十郎左の衣服があつた。きちんと、疊みつけてある。古い帯、古い持物、すべてが、几帳面に。

「若かつたなあ」

ひたと、横顔を押しつけた。若い十郎左の温みはまだあるやうな気がした。すると、その間から、何か落ちた。

「?……」

見ると、濃い紫の縮緬の小布だつた。ふく紗にしては、耳縫ひがないのである。何かつゝんであるので、開けて見ると、何と、琴の爪が一つ。

琴の爪?

あの美貌で剛氣な武士のこれが死期までの品だらうか。傳右衛門は、ひよつと、そぐはない気がしたが、二日の晩の彼を思ひ出して、

「さては……。吉良殿のお寢間とは……」

讀めたのである。

もう一人、彼は、べつな最後を見送る責任を感じた。……だが、夜だし、もうあそこに居るか居ないかを疑問にしながら、その夜更、駒を家路へ向けてゆくと、金杉橋は眞つ暗だつた。

番屋をたゞいて、訊かされると、やはり、彼女は傳右衛門を待つてゐた。だが、もう生ける人で

はなく。

あれから、番屋の者の隙をねらつて、すぐ表の川へ、身投げをしたといふのである。そして、何か、手紙を抱いてゐるし、晝間のことがあつたので、死骸に菰をかぶせて、再び、傳右衛門が通るのを待つてゐたともいつた。

「どれ……。會はう」

番太郎は、菰をめくつた。白い顔が、馬上の傳右衛門に、いつもの眼を向けてるやうに仰向いてゐた。そして、その胸に、かけてある、紫縮緬の頭巾は、隅の所が、五寸ほど、四角に切りとつてあつた。——ちやうど傳右衛門が懷中に持つて來た、琴の爪をつゝんである小布ぐらゐほど、缺けてゐた。

「よし、この死骸は、わしがひきとる」

傳右衛門は、彼女の抱いてゐたといふ手紙だけを、袂に入れて、蹄の音もやゝ軽く、家へと、駒を急がせた。

馬のそばに、駈けてゐる、若黨や仲間には主人の氣持が判らなかつた。——で、やゝ彼の面が、牙えたのを見上げて、

「旦那、あの女は、一體、なんでございます」

「侍女ぢやらう」

「へえ。何處の？」

「吉良殿の——」

と、いつて、すぐその下から、

「人に申すなよ」

傳右衛門は、手綱をのばして、反り身に、二月の星を仰いだ。そして又、獨り語にいつた。
「修藏も、あれでいゝ。お麗のねがひも容れてやらう」

鬼

「——お待ちかねで居らつゝやる。何、その儘の支度でさし闕へありますまい。すぐ庭口へ」と、近習番に促されると、棟方與右衛門は、よけいに足も進まず、氣も晦くなつてしまふ。

案のぜうである。

大書院へ出てゐた君侯の面には、焦燥のすじが立つてゐた。與右衛門が土へ手をつくすとすぐ、

「討つたか」

と、頭から云ひ、そして與右衛門が顔を上げずにあると又、

「主水めの首をこれへ見せし」

と云ふのだつた。

出羽守の立腹も、藩の士氣を正すためには、當然さうなるべきで、ただの疝癪ではないのであ

心。

家臣の福原主水が、女の意趣とか何とか、言語道断な沙汰で、同僚の者を暗殺した上、濫用を詐稱して、城下の町人から急場の金を借り、それを持って、今晩、津輕領から逐電してしまつた。追手討!

勿論、棟方與右衛門だけが、君命をうけたわけではないが、生憎と、足輕頭である與右衛門は、その朝、細下を連れてこの弘前城の二の丸へ早くから出てゐたので、出羽守の眼にとまつて、(そちも行つて、手功をして来い)

と吩咐けられたものであつた。

これは君恩と云つていい。かういふ折でもなければ、十石の扶持でも上げられる時勢ではないし、一藩に認められるのもこんな時こそ侍の働き效ひといふものだつた。

與右衛門は勇躍して、主水を追跡した。そして南部領へ落ちて行かうとする彼を、出羽街道の銚ヶ關の山中で見つけ、

(君命であるぞ、主水! 首を所望)

と迄は、名乗りかけたし、又討つて歸るつもりだつた。

銚ヶ關まではずるぶる山道を歩く。人にも會はない道が何里とあつた。主水と出會つた山中も、佛法僧の聲しか聞えない樹立ちの間だつた。

兇惡な——上わずツた眼でもしてゐるかと思像してゐた主水は、案外、落着いてゐて、悪びれたふうもなく、

(騒がしてすまなかつた)

と最初に云つた。

それから彼は、同僚を斬つた理由を語り、濫用と詐稱して借りた金を、實は自分の身に帯びて來たわけではなく、同役は今みんな喰へなくなつてゐる。扶持では實際に食へない實状なのだから仕方がない。それに起因して、自暴自棄になりかかつてゐる輩がかなりある。自分もその一人なので、こんな時だと考へたから、大町人の金を借出して、そつと喰へない仲間へ置いて來てやつたのだとも云ふのである。

——そんな話を聞いてしまふと、與右衛門は、主水を斬る氣を失つてしまつた。主水は又、與

右衛門に對して害意を抱いてゐる氣色など少しもない。むしろ懐しげに現在の藩の困窮だの、武士道と實生活の矛盾だの、そこから起る弊風だの……つい與右衛門も頷いてしまふし、彼も話しやめようとしなない。

人氣もない山中の禽の聲を聞きながらであつた。

——藩へ歸つて來てから、しまつたと後では思ひ、今又、君侯の顔を仰ぐと、愈々、(不覺をした)

といふ自覺にふるへが出て來る程だつたが、もう追ひつかない事だつた。

それについて、空きり嘘もいへないので、錠ヶ關の附近で主水の姿を見かけたが、力及ばず討ち洩らしたと答へたので、津輕出雲守は、よけいにその胸甲斐なさを怒つて、

「ものゝ役に立たぬ奴ぢや。恬として、恥とも思はぬ面よな。祖先以來、事なき日にも、祿を與へておくのは何の爲と思ふ。そちはそれでも米を喰つて生きてゐる武士か」

殿が蔑むと、側にゐた老臣や近衆までが共に罵倒して、

(自分が上意をうけて行つたなら)

と云はないばかりに、侍らしい顔をした。

勿論この後、棟方與右衛門は五十日閉門になつた。輕いはうだとみな云つた。

三

「……初めて聞きました。お父様にそんな事があつたんですか」

爐の炎にも熱くなつてゐた臉を、傷ましうに、父の顔へ上げると、お珠の涙は赤く光つて、膝の先にこぼれた。

「おまへがまだ、十か十一頃の時の話ぢやよ」

棟方與右衛門は、わが娘の感傷を見て、これは益もない話を聞かせたと悔ひるやうに、薪を取つて、爐へさしくべた。

大きな爐だつた。ふつうの家の二倍もある。それに夜も晝も火を焚きづめにしてゐるので、この小屋の木材は脂を沸き出して煤は漆みたいに光つてゐた。

どうつ——と、強い風壓がぶつかつて來て、時折小屋の木材が軋む。ちやうど船底で怒濤を聞いてゐるやうな感じだつた。

鬼、かうした外戸の吹雪は冬のあひだ毎日の様に續いてゐた。

「可哀さうなのはおまへだ。母ももう居ないしなあ……娘さかりをこんな山小屋に送らせ、冬は吹雪、夏は土仕事」

「お父様、もう仰しやらないで……。私などより、お父様こそ、山へ来てからするふんお老けになりました」

「やめよう、自分から望んでこゝへ移つて来たのだ。若い娘も犠牲にするのを承知でわしは就役して来たのだ」

「いゝえ、お父様は、私を犠牲にしたと仰しやいますが、私にだつて、今のお仕事は大きな張合でございます。たとへ何年かゝらうと、働いてゐれば、やはりお父様と同じやうに、大きな楽しみとなつて居りますから」

「いやいや、男のわしでさへ、時には泣きたい思ひもする。まして女のそなた、苦しいだらう。……山へ来てからもう四年だ。おまへも今年は二十五ぢやらうが」

「えい、いつの間にか」

「嫁入期も過ぎてしまふ。ゆるしてくれなあ」

「お父様、餅でも焼きますから、お酒でもすこし上つて、又いつもの素話でも」

「あるか」

「ございます」

「ちやあ少し爛けてくれ。……そしてわしの机のうへに積んである繪圖面と書類をこゝへかしてくれ」

擴げると、疊二枚分もあるやうな大きな圖面やら、小圖面等が、幾帖も出来てゐた。それも書類も、すべてこの中津輕と南津輕との間を横斷してゐる五所川原の治水工事に關するものばかりだつた。

棟方與右衛門は、それへ見入りながら、頬杖を膝に突いて、苦念してゐた。――お珠は一人の下男を相手に、小屋の流し元で、氷を割りながら、その父を慰める爲に、これも夕餉の茶に心をくだくのだつた。

四

鬼
表高四萬六千石といふ津輕家の經濟は、もう先代出羽守の時に、困窮を極めてゐたが、當主の代になつてからは、まつたく行詰つてゐた。

領土の面積からすれば、佐竹と南部の國境以北、津輕半島だけの廣さでも尨大なものだったが、半島の背ばねには陸奥山脈が横になり、西も又、山地ばかりで、その間にある津輕平野の何十里といふものも、山岳地方から縦横に下りてくる無數の川に荒らされて、まったく不毛の地であつた。

わづかに、居城のある弘前を中心に、黒石支藩の地方にかけてだけ、産業も文化もやゝ見られるものがあるといふ状態なので、表高は四萬六千石でも、その實收穫は、四萬石が缺けてゐた。

津輕貧乏見され

わしが貧乏はらくよ

水の苦もない

扶持減らしもお坐らない

隣藩の佐竹や南部で、こんな唄さへ唄はれたほどだつた。

藩主が粗服を着たり、朝夕の食膳の菜を減らしたりして儉を示してみせる事も、何の效ひもな

家臣は皆、減俸に甘んじ、領民は祭禮の行事まで見あはせて、税を稼いだ。

けれど、一夏、岩木川の氾濫があると、全民は打ちのめされて、又二年か三年は、火あぶりになつても税も脂氣も出ないといふ領民がたくさん出来た。

反對に、士風も民風も、人間はますます悪くなるのである。人斬り沙汰、女沙汰、盜難沙汰、つまらない家中の葛藤、そんな事が絶えない。

——そんな風潮の中で、棟方與右衛門は、長年笑はれ者になつて來たのである。

「あれは、福原主水の一件で、殿から、米を喰つてゐるか、と訊かれたといふ無類の能無しだ。米喰ひ武士でなうて、米喰ひ蟲だ」

穀つぶしといふ名稱は、穀物の極端に尊ばれてゐる時勢にあつて、最大の侮辱であつた。

——米喰ひ蟲の與右衛門とよばれながら與右衛門は何年も飯も噛む間は猶さら考へた。

(何か御奉公したい)

或年、檢見役人に尾いて、岩木川の水害を檢分に行つた時、彼は後に残つて、なほ旅をつゞけ一つの決心を抱いて歸つた。

家老の邸へ行つて、與右衛門は悲壯な眉をして云つた。

「どうぞ、これを殿へ御披露してください。曲げて、お許しのあるやう、あなた様からも何と

ぞ』

と、一通の献策書をさし出した。

岩木川の治水を中心とする津輕平野の治水策であつた。彼が寝ずに書いた献策書は、半紙七十枚綴で四冊もあつた。

所要の延人員何千人、総費用いくら、完成の期日はおよそ何の位——といふ数字も彼の計畫も残らずそれに盡してあつた。

だが、用ひられる筈もない。

(能無しが無念がりを起して、邸へ日参して閉口ぢや)

取次した家老さへが、そんな程度で、城内の笑ひ話にしてゐた。

だが、與右衛門の熱心は熄まなかつた。その熱心がやゝ買はれたのであらう、翌年は正式に、檢見役人の一人として、出張を任命され、やがて、二年も経つてから後、殿が彼の献策書を見たとはいふ沙汰で、與右衛門の宿望が、半分ほどかなへられた。

彼の献策した計畫では、餘りに大き過ぎるといふのである。——で、その計畫を三分の一程度に縮少して、五所川原地方の一部の開墾役を任命するといふことになつた。

『何があいつに』

『米喰ひ蟲が、百姓の中に交じつたら、百姓は嘆き限れまい』

一人娘のお珠をつれて、不毛の奥地へ出發した與右衛門の旅装の背へも、やはりそんな嘲笑のみしか送られなかつた。

五

五所川原の宿場から一里ほど南の山——御月山の中腹に、彼は、小屋を作つて住んだ。

治水工事を奨励する開墾役所は、その麓に置いたが、そこさへ、低地である爲、連雨となると水の危険があつた。で、大事な圖面や書類は、なるべく寢小屋のはうへ置くやうにしてゐた。

『——廣いなあ。この廣い平地に、これだけ稻の穂が實つたら!』

こゝへ寢小屋を建てる時に、彼が一番に叫んだ言葉はそれだつた。

だが、この高地からながめても、その廣い天賦の平地も、まるで人間の靜脈のやうに大小無數の河水が奔馳してゐて、人力の痕跡らしいものは殆ど見えないのである。

それからの彼は一人の下僕をつれ矢立と紙を持つて、毎日、この荒蕪な平野を實地に踏査して

みることだつた。そして、各村の庄屋を訪ねたり、老農について、體驗を聞いてみる事だつた。その人々は、口を揃へて云つた。

「それやあまあ、旦那様のお考へは結構ぢやが、どんなに人間と金をつかつたつて、一反の田だつて、出ける事ぢやごわせんぞい。わし等、山つなみだの、洪水だのと、水に惱まされてゐるとは先祖代々からのこつて、その先祖たちも、どれほど今日までにやあ力を協せてやつたかも知んねえし、御領主様だつて、御奉行所や開墾役所を置いた事も以前にやあ有つたが、みんな金を水へ捨てに来るやうなもんで、役所を拂つて四十年も抛つたらかしくなつてゐるくれえなもので……。旦那様あ又、偉い目におあひなさるだけのことぢやで」

體驗の多い老農ほどさう云ふし、五所川原の代官などは、口を極めてその無謀を諫めて、

「まあせつかく、殿にも御意がうごいたところ、今更、御中止にもなれまいが、御病態を作つて、藩のはうへも、延々にしておかれたがよろしうござるぞ。藩政御困窮の折故、溺れるもの藪をもつかむで、殿にも、僥倖をのぞまれるのであらうが、心ある老臣方は、たゞさへ御手許の不如意なところへ、莫大な失費。そこもとが病態を作られれば、重役方は、かへつて眉をひらかうといふものでござる」

と、云つた。

然し、與右衛門は斷乎として、その年から治水工事に着手した。

同時に、あらかじめ藩廳の許可をうけてある令をもつて、津輕平野を圍む一帶の村落百十餘ヶ村へ對して、人税を課した。

人税といふのは、一戸當り幾人といふ努力を、月割に徴發することで、勿論、無報酬の勞働なのである。

六

「飛んでもねえ事になつて來たぞい」

「何ぢやあ彼の棟方與右衛門ちう奉行は、あんでもえ、足輕頭だつたといふでねえか、足輕に百姓のことが分つてたまるもんでねえ」

「婢すら食ひかねるつちに、此上、人税などと、おらたちの血までしぼる氣か」

百姓たちは、俄然、不平を鳴らし出した。

それでも、一夏から秋迄は、各村の庄屋や年寄の慰撫で、澁々ながら、課せられた人員は仕事

に出た。

だが、渺茫たる大自然の下には、蟻が穴を穿つたほどの工事の跡も見えない。多少、豫定工事が進んだかと思へば、一日の豪雨で洗ひ消されてしまふ。

冬は、仕事が出来ない地方である。豫定の二ケ年はとくに過ぎて、藩地のはうでも暮々と、非難の聲があがつてゐた。

(この御困窮の折から、あのやうな無能者を奉行にして、莫大な金子や物資をかう送つてどうするんだ！)

と云ふ意味である。

云ふ者も又、切實なのだ。自分たちの口も減らされ、家族は生活を極端に切り詰められ皆顔いろがわるい。さういふ場合なのである。藩の金でも、自分たちの金を捲られる氣がするのであらう。

——だが、殿の越中守は、近頃になつてよけいに、與右衛門の信念に引きずられてゐる形であつた。

老臣が、折を見て、

(御中止になられては)

と、家中の怨嗟をそれとなく訴へてみても、

(やらしておけ。今やめるも、尙すゝませてみるも、藩の財政が困窮は同じことぢや)

同じではない理由を云つても君侯の事だつた。君言をもつて、やらせておくと云ふのでは老臣も匙も投げて拱手してゐるほかはない。

(あいつめ、案外ぬかりのない奴ぢや。絶えず、殿へ報告をよこしをる。この文書に、殿は惑はされて御座るにちがひない)

五所川原開墾役所といふ角判の飛脚が、藩廳へ届くたびに、藩の者は、米喰ひ蟲の與右衛門を罵倒するのを茶話にしてゐた。

さうして、最初の二ケ年計畫は、工事の進捗上、三ケ年計畫に變り、後に又、棟方與右衛門が自身、殿へ實情の報告に来てから、再度、五ケ年計畫といふ事に變更された。

當然、津輕家の經濟は、骨と皮ばかりになつてしまつた。城下の大町人からは、借上げられるだけ借てしまひ、町人といはず百姓といはず、關所さへなければ、みなこの餓鬼の預地から逃散するであらうと思はれた。

藩では、江戸、京都、大阪あたりの商人からも、負債を求め、そして一半を急場に當て、一半は治水開墾事業のはうへ送つた。

藩廳へ打合せのことがあつて與右衛門が弘前の城下へ出て來た折、與右衛門は、何者とも知れない武士から暗討をうけた。俸ひに、危険はのがれて歸任したが、もうその頃から、

(あいつを殺してしまふのも、藩の御困窮を開く一つの途だ)

と云つて激する者が出始めてゐたのであつた。

七

(おれは能無しだ、米喰ひ蟲にちがひなかつた。せめてこの位な事を仕送げねば)

と、與右衛門は、自然の暴威にも、人間の迫害にも屈しなかつた。

又、つくづく思ふには、

(幕府の御制度の中にある藩地である。藩の制度の下にある經濟である。お上には、どんな御失費も滞澁ができぬやうに、下の者も、どんな事をして、苛税に骨を削らなければならぬ。下ほどそれは辛くなる。出ないものを絞りに出す苦惱なのだ。——所で、さういふお上と下のあひだに

立つてゐるのは誰だ？ 武士といふもの達だ。——この際、武士のすることは何か？)

それを痛切に彼は考へる。

(打開と云つても、御制度の中での打開だ。津輕領以外へ何の策も施す途はない。自己の持つ土の上に打開を求めるほかないではないか。——又武士は、自己の爲すことを、自己の分の中から、今こそ求め探して、奉公にさし出す時ではないか。——元祿、寛永の武士道をそのまゝ習慣にして、刀にかけてものをいふだけが武士道だと心得てゐる時機ではなからうが)

結論に於いて、彼はかう極めてゐる。

(世の中は、生きてゆく、殖えてゆく、進んでゆく、粗衣粗食の御節約も結構だが、絶對に、消極策といふものは、どんな飢饉の地でも適合しない。つまりこの世の中といふものゝ本質に適合しない)

それから彼は覺悟を極めた。

(鬼になれ。——鬼になつてやらねば出來ない！)

お珠が見ても、父の人相が此頃變つて來たと思ふ。土や水と闘ふので、氣はあらく猛々しくなつた。

仕事場に出る時の身支度を見ても、厳めしさと云つたらない。晒布の褌袴だけは毎日洗つたものを着せてくれとお珠へ云つたのでも分る。——出る朝をいつも死ぬ日と心に決めてゐるらしい。

もうやがて五十に近い體を、山支度に厳しく固め、手には寒竹の鞭を持つて出かけ、工事場で彼のことに遊ぶ者があつたり、惰眠を偷む者があると、

「こやつツ！」

耳まで裂いたやうな口を見せて、大喝の下に撲りつけた。

或時は、夏の泥土や草いきれの中で、怪我をした百姓や、痲病に罹つた者などを、眼に涙をたたへながら手當してゐる彼の姿を見る事もあるが、仕事に直面すると、まるで仕事の權化だつた。

一刻も、たゞぼんやりしてゐる事などはない。自分も土を擔ぐ、石も運ぶ。

お珠ですら、こゝへ来て、百姓たちと交つて働いてゐる程だつた。

「——お珠さん、少し休むだがい。わしが土竈の火も見てゐてやるし、薪も割つといてやるで」

十川村の郷士の息子だといふ安太郎が、いつも彼女を傷々しがつて、湯沸し場へ慰めに來た。

湯沸し場仕事もたいへんだつた。尤もこゝ一ヶ所ではないが、こゝへだけでも三百人ぐらゐな者が、晝飯時には殺倒してくる。炎天の下で、薪を割り、土竈に火を焚き、水を汲んでくる。

初めは、川水を飲んで仕事してゐたが、饑毒に中つて、何十人か一度に罹病したことがあるので、

——この水はのむな

と云ふ高札を立てゝある川と、

——この水のめる

と云ふ立札の立つてゐる川とがあつた。それは勿論、與右衛門の字だつた。

八

半島の東西の山岳地帯から集落して、この平野を縦走してゐる川は主な川だけでも十幾つかあつた。それが各々、秩序なく、打つかる所であつたり、分れては幾條にもなり、水と石と高低の多い土地とが、噛み合ひ、奔激し合つて、やゝ落着いてゐる所は又、身を没するやうな茅の沼池と

いふやうな原始的な姿だつた。その水の自然性に、秩序を興へ又、狂暴性を取り除けようとする
 與右衛門の事業は、第一年から三年目の半迄、殆ど徒勞であつた。

だが、屈しない彼の頭腦は、かういふ事に氣づいた。

（おれは今日まで、斷崖には石をたゞみ、平地には堤を築き、水をかうやらうとすれば堰を固め、
 人間の力で水を虐め込まうとして來たが、これは拙劣だ。——だから水に勝つたと思ふと、何百
 間の堤も、一夜の暴雨に蹴くづされ、仇をとられる事になつてしまふ。——これからは、水を自
 分が動かすと思はないで、水の性能に従つてみよう）

彼は、今までの基礎を捨て、根本から工事方針をそれから建て直してかゝつた。

その間にも、百何十ヶ村の不平と非難は、彼の一身に集まつて、幾たびか、暴動が起りかけ、
 幾度か、ふくろ叩きに會ひかけたり、河の中へ故意に突き落されたり、さまざまな迫害はあつた
 が、工事の大變更に、百姓たちの抑へてゐた憤りは又火を呼んで爆發した。

「おら達がかうやつて働くの、あの奉行めは、遊び事だと思つてゐるのだぞ」

「何年間も、錢一文もらはねえで、牛や馬よりこつびでえ使ひ方しさらして、それを又ウツちや
 つて、他のほうへかゝるたあ何事だ」

「もう、仕事に出るな、死んでも出るな」

「いッそ、ぶつ殺せ」

「さうだ、ぶつ殺せ、あいつを」

險惡な晩が、幾晩もつゞいた。夜になると、御月山の小屋に坐つてゐてもそれがわかる。遠い
 山麓に點在する部落々々で、火を焚いたり、鐘を撞いたりしてゐるもやうが、赤い空に映つて見
 えるからだつた。

その早鐘は、お珠の胸をさわがして、眠らせなかつた。

「——お珠さん、お珠さん……。もうお寝みかい。安太郎だよ。心配になるからやつて來たんだ
 が、ちよつと外へ顔をかしてくれないか」

小屋の窓の戸をコツ／＼叩きながら、低聲を弾ませて云ふ聲がする。——お珠は身を起しかけ
 たが、父の寢息をながめてから、そつと外へ出て行つた。

九

大きな月が半島の山の骨をあさやかに見せてゐた。

津輕灘の海らしい果に、蝦夷まで見えるかと思はれるやうに冴えた夜である。

「……だめかい？ だめかい？……お珠さん。どうしても、お父さんにこの事業を思ひ止まらせる事はできないかい」

「白骨にならないうちは止めさうもありません」

「——あゝ困つたなあ」

「安太郎さん……」

お珠は突然、握りあつてゐた手を解いて、より強い力でしがみついた。

「後生ですつ。……これから方々の村々へあなたが廻状して、もいちど、みんなを宥めてくださいませ。……あなたのお父さん、郷士でもあるし、學者だともいふ事です。あなたのお父さんにもお頼みして」

「ところが、その父が、與右衛門殿のする事を、頭から悪く云つてゐるんだよ。この下の開墾役所に打ッ壊しが始まれば、先に立つて来るはうだ。」

「……でも！ 安太郎さん、あなたのお力で、纏つてください。……ね、安太郎さん、お珠が生のおねがひで御座います」

青じろい月の下に、白い襟くびが泣きふるへてゐた。安太郎は着物を透してくる女の涙の温さを肌を受け取つてゐた。

「よしつ、やつてみるよ！……泣かないでもいゝよ。これから夜明けにかけて、廻状をまはし、何とか父も説き伏せてみる。……そのかはりお珠さん、おれの氣持も忘れずにくれるだらうな」

「ありがたうございます。安太郎さん、この御恩忘れはいたしません」

「だけど、結局、この事業は物にはならないぜ……。もう手も足も出ない所まで行けば、與右衛門殿は元よりの事、わし達の運命もどうなるか」

「さういふ凶い行末が見えてゐても、安太郎さんは私を……」

「わしは、だからこの戀には、生命を賭けてゐるんだぜ」

「どうしよう！……す、すみません安太郎さん」

欣し泣きに嗚咽するお珠の顔を、酷いやうな力でいきなり抱きしめると、安太郎は、彼女の唇に情熱の迸るまゝに甘い空息を與へた。

七澤、砂澤、十腰澤、さういつた麓の地帯で、地の利を利用して、周圍何十町もある大溜池の開墾工事ははじまつた。

掘つた土は、低地の茅原や沼池をどん／＼埋立て、行つた。一ヶ所の溜池ができると、附近の川の性能がまるで違つて來た。なぜならば廻り堰を巡つてこゝへ集まつた水は、任意に休息して、新川堤に沿つて柔順に出てゆくからである。

豪雨が出ても、その附近だけは、もう水は吾儘でなかつた。

與右衛門は思はず、

「——見えたつ。先が見えたつ」と、雀躍りしてさげんだ。

豫定の五年目の春頃には、その大溜池が、何ヶ所となく竣工した。その竣工は又、堤防工事、護岸工事、すべての仕事のはうに基調を興へて、彼はふたゝび藩公へ、延期の願ひを出す必要がなくなつた。

支流的な州すじの工事はほど終つたので、彼はこの夏、最期の仕上げ仕事としてゐる岩木川の上流の主脈に、全力をかけてゐた。毎日の入税徴發は、百十餘ヶ村から二千名近くの人員が狩り出されてゐた。

この平野を吹く風が汗くさく思へるほど、泥と汗にまみれた百姓が、上流の溪流を、平地へ出さずに、それを大溜池へ導いて、徐ろに新川堤からほかの川へ放出する工事に向つてゐた。

「もうひと息だぞーこの秋迄だ！」

寒竹の鞭で、撲る者を見つけてゐる。

その鞭で、皮膚をやぶられた百姓は、何十人か何百人かわからないほど今日迄にはあつたのである。

あまり與右衛門が焦心つて督勵し過ぎた爲、溪流の護岸工事で、無事な仕事をしてゐた者が、その崖崩れに合つて、十何人かいちどに生埋めになつて死んだ。

それを炎天の下で聞いた時も與右衛門は一言、

「さうか」

と云つたきりだつた。

そしてすぐ、小頭を呼びつけ、

「死體を掘り出したら、死體はひと先、日蔭の草の上へでも並べてをけ。始末は晩のことでいゝ。

——やむを得ない！——ここは戦場だ。人死に驚いて、戦がなるものか。工事もすぐ続ける」

こんな犠牲者も、今年ばかりあつたのではなく、無数にあつたといつていゝ。それに對しての

與右衛門の態度も、此頃は極めて冷淡になつてきた。

「人非人つ」

「鬼め」

石をたゝみ、鉄をふるひ、汗を眼にながして働いてゐる人々は、皆、彼の殘忍を口のうちで呪つた。

一一

汗の下に咲いた可憐な龍膽の花が、見られもせず、草鞋で踏まれる秋になつた。
湯沸し場に、人立ちがしてゐた。

「何だ、何があつたんだ——」

近くの者が、わらくとそこへ駆けてゆく。

案のせう、又、與右衛門の鞭で打ちすえられてゐる者があつたのだ。けれど、今日は百姓ではなかつた。彼の子であるお珠だつた。

「——かにして下さい、悪うございましたつ。お父様つ」

鞭の下に泣きさけぶと、

「父とは何だつ、工事場では、父娘のけじめはないと云つてあるぞつ」

と云ひながら、又も打つのだつた。

鬼のやうな顔の父へ、手を合せてわびてゐたのに、その手を鞭で撲られて、彼女の指から血が走つた。

——ひいつ——と泣き伏すと、

「心にこたへて置けよ！おのれつ、おのれつ」

背を打つ。かよはい腕の根へ打ち下ろす。

見るまに、彼女の皮膚は斑になつた。

すると、その後、もう一人俯つ伏してゐた若い男が、いきなり草埃りと一緒に刎ね起て、

「あんまりだツ。いくら親でも！」

と、與右衛門へ組みついて来た。

與右衛門は、一氣に振り拂つて、

「そちもだツ」

と、鞭に唸りをくれた。

『わつ』

と、若者は顔をかゝへてよろめいた。安太郎なのである。

男女が、わづかな間を偷んで、湯沸し場の裏の日蔭で、樂しげに嘔き合つてゐた所を、與右衛門に見つけられたのだと、見てゐる百姓たちが話してゐた。

「——な、撲つたな、畜生の」

「まだ足らん、それへ直れ」

「わ、わしを、凡の人足扱ひにしやがつたな。わしはこれでも、十川の郷士だぞ」

「郷士が何ぢや、この與右衛門の眼からは郷士であらうと、子であらうと、何者でも皆、一日いからの土が捲げるかと思ふ、一箇の人足に過ぎないのだ。たとへ、御領主様がこゝへお出であら

うともその心底に變りはないの」

「お珠さんが、可哀さうだと思へばこそ、おれは自分の父も説いたり、かうして働きに來てもゐるんだ。……て、てめえのやうな奴の爲なら」

すると與右衛門は、嘗つて、いくら怒つてもこれ程な形相は見せなかつたものを眼氣から燃やして、

「わしの爲に？……。ばツ、馬鹿者つ」

と、嗚りつけた。

「わしは君侯と領民のあひだに在つて、自分のする事の爲にしてゐるだけだ。津輕家の爲とも考へてゐない。百姓達の爲ともべつに考へてゐない。——しかしわし自身の爲にでない事だけは天地に云ひ得るのだ」

「な、なに云つてやがるんでツ。……てめえは今更、夜逃げもできず、藩へも歸れねえからやつてゐるのだ。かうやつて、不平を云ひながらも、百姓達が働いて來たのは、汝が恐いからぢやねえぞ、殿様が恐いからだ。もつと分りよく云やあ、磔刑や縛り首になつちや堪らねえから、涙をのんで、食へねえ中を、一揆も起さずにやつて來たんだ」

「だまれつ、わしはこの事業だけには、三軍を率ゐる將軍だつ。絶対にわしに従へ、わしに従へん奴は来るなつ」

「オ、誰が来てやるつ」

と捨てぜりふを投げて、安太郎は走りかけたが、赤く腫れた眼を振向けて、

「おれは来ねえが、そのうちに、二百十日が襲るぞつ、覺ておけつ」

一一一

安太郎の姿の見えない日から、工事場の人数が目立つて減つた。

「十川村とその近村の者は、一人も来ねえが？」

と、来てゐる者にも、動搖があらはれた。

秘密裡に廻状がまはつてゆくらしく、毎に入員は減るばかりだつた。夜になれば、空は赤く村々を焦がした。

當然——これに對して五所川原代官所が、與右衛門の役所と協力して、處置にあたるのがほとんどだが、その代官は、大溜池の竣工をながめても、欣ぶ色のなかつた人物である。

「安太郎の仕業だな、氣の小さい奴つ」

父がさう唸いてゐるのを見て、お珠は、自分の身の置き場のないやうな氣がした。

然し——一人になつても、おれはこの冬までに最期の工事を仕遂げると、與右衛門は云ふのだつた。

ひと頃の十分の一にも人手は減つたが、ふしぎな事には、その一屯の人数には、何の動搖も見えないのみでなく、かへつて、孜孜として夕方まで暗くなる迄働いてゐる様子があつた。

「無智な百姓共のうちにも、やはり少しは、自分の懸命さを分つてくれる者もあるとみえる……」

彼はそこへ、感謝を云ひに行つた。みんな仕事が終わつて、星の落ちてゐる暗い川べりで手足の泥を洗つてゐた。

「——おや？」

その中に一人、法衣を着てゐる男があつた。變に思つて、顔をのぞいてみると、姿も皮膚の色もまるで變つてしまつてゐるが、それは十數年前に鏡ヶ關の山中でわかれた福原主水のなれの果であつた。

「あつ？……おうつ……主水殿……どうしてこゝへ来てゐるのか」

「到頭、氣づかれたな」

福原主水は、笑つて云ふのだつた。

「去年も来てゐた……今年も又来た……だが貴公がこの事業を成し遂げるまでは、名乗り合ひたくなかつた」

「ぢやあ、わしの事業に、力をかす氣で来てくれたのか」

「それ位なことはせずば……」と、暫く黙つて、自分の法衣の袖を示しながら、

「かういふ物を着てゐる身だ。こゝで働くのも修行になるしなあ」

「かたじけない」

「棟方殿、弱氣を出すなよ」

「とにかく、小屋へおいで下さい」

「行くまい。この津輕平原に、青田の風が吹くやうになつたら行かう。……もいちど云つておくと、弱氣を出すな。……錠ヶ關で、わしを逃がしてくれたなどは、弱氣といふものだ。助けられたわしも至らない人間だつたが、おぬしとしても、あれはやはり賞められない事だと思ふ。弱氣を出されるなよ」

切れ草鞋をぶら下げて、何處へ歸るのか。福原主水は夕闇へ去つた。

與右衛門は見送つて、

「さうか……あの主水が働ながら傍の百姓達に、説教して居てくれたのだな。それで、今残つてゐる人数だけは、黙々と仕事に就いてゐてくれるのだ。……主水、ありがたい」

涙をうかべながら、彼は、そこにまだ相手があるやうに頭を下げた。

一三

ひどい暴風雨であつた。二十十日も来ないうちに來たのだ。

小屋の屋根の石も飛びさうに思へる。

「棟方つ、棟方どのつ、すぐ来いッ大變だ」

青田を見ないうちは來ないと云つた福原主水の聲なのだ。破れるやうに戸を叩く。

與右衛門も、お珠も、土砂降りの雨を衝いて、麓へ駆けて行つた。

この暴風雨に乗じて、何者か悪戯した者があるらしい。最難工事としてゐた岩木川の上流の石垣がくづれ、續いて山崩れを招いてゐた。

「ウ、ム……」
手の下しようもないのである。泣きたいやうな皺の痙攣が瞬間、與右衛門の顔をかすめたが、
すく、

「これ位な事はあつていゝ。何事にも、も一歩といふ手前にはやつてくる奴だ。よしつ——」
發狂したのではないかとお珠は父の動作にびつくりした。與右衛門は簀笠のまゝ、溪流のふち
へ崩れ落ちた石を一箇一箇、上の小道へ上げ始めた。

福原主水も、その意を怪んで、

「どうするのだ、この暴風雨の中で」

「これを見ては、伏んでゐるわけにはゆかぬ。たとへ石の一つでも、今からやれば、それだけ違
ふ。」

「ウム、わしも行つて来る」

福原主水も、開墾役所の馬をひっぱり出して、暴風雨の中を、それへ乗つてどこかへ飛ばして
行つた」

狩り出されて来た百人程の者が、協力して、第二の山崩れを防いだ。大溜池の決潰も事なく濟

んだ。

僧衣の人足と、鞭を持つた奉行との必死は、翌日の仕事からまるで血みどろになつた。二人の
意念は、この大事業の完成が近づくと共に白熱化して、まつたく土と汗とに同化してしまつた鬼
のものに見えて来た。

一四

一昨年あたりの事は夢のやうにしか考へられない。

御月山の小屋の窓から眺めてみるがいゝ。今——そこには何もかも忘れて欣んでゐるかのやう
な明るい顔が二つ並んで、飽かずに、視野を楽しんでゐた。

お珠と與右衛門の父娘である。

五月の晴れ澄んだ空よりも、地はもつと／＼青いではないか。五所川原の宿場などは、青田の
中に浮いてゐるやうなものだ。遙か、向ふ側になる山岳の裾までも、その青い苗の波つときであ
る。

「田植が濟んだなあ」

「あしたは、百十ヶ村で、お祭りするんだと云つてゐます。そのお祭りをするために、氣を揃へて、何處の村もみんな今日までに植付けを済ましたんだといふ事でした」

「ほう……さうか」

「うれしいでせう……お父様」

「お珠……おればかりが欣しさうだな」

お珠はドキツとして慌て、

「そ、そんな事あるもんですか。……私は何も考へてやしません」

「ぢやあ、云はして貰はうか。欣しいぞお珠、おれは欣しくて、涙としてゐられない氣がするんぢや。ア、早く明日になれば、百十ヶ村で吹きたくく笛太鼓をおれは聞きたい」

「お父様の力で、今までの洪水も出なくなり、沼や河原ばかりだつたこれだけの廣い地面から、青い風がそよ／＼吹くやうになりました」

「わしの力。……さうでない、やつぱりみんなの力だ。たゞそれに鞭を打つ鬼があつただけだよ」

「もう、鬼なんて、一人だつて云つてる人はありません。百十ヶ村の救ひの神様だと云つたりし

て、明日は、この山へ笛や太鼓を擔いで来て、お父様をみんなが慰めるんだと云つてをりました」

「さうだ、お珠。……百姓達はまだ、あの田から、まだこの秋にならなければ、ほんとの米を收穫ことは出来ないのだ。祭りをしても、それは随分苦しい中の才覚だらう。多年疲れきつてゐる懐中へ、少しでも、費えをかけては濟まん。……お前は、その鍵を持つて行つて、麓の役所に残つてゐる藩のお金をみんな出して、五所川原から酒を買へ、有りたけの金で酒や肴を買ひあつめてくれ」

「えつ、藩のお金ですか」

「殿様へ申しわけは、わしが立派にする。恐らく殿様も、お怒りはなされまい。——心配しないでいゝ。この秋には、新田から少くも一萬石の米が收穫るだらう。年毎にもつと收穫てゆくぞ。なぜならば、わしの信念が、百姓たちの信念になつたからなう」

「ぢやあ、行つて來ます。……いゝんですか、ほんとに」

「ウム！ 今から五所川原まで行けば、夜になる、買物も揃ふまい。久しぶりでおまへも、町の中で泊つて來い」

「ことによると、さうなるかも知りませんが、明日の朝は、買物を馬に着けて戻つて参ります」
 小屋を出て行つたと思ふと、お珠は、又馳け戻つて来て、
 「お父様、福原主水様がいらつしやいました」
 と告げた。——その後、新しい草鞋を穿いた主水の雲水姿が立つた。

一五

「おわかれに来た。——棟方殿、お欣びはこの間云つたから、今日は、御健在を祈つて去る」

「え、旅へか。——まあ上らんか」

「交友は水の如く淡々たるをよしとする——と誰やら云つた、そのうちに又此地方へ来たたら寄らう」

「急だなあ」

「ちつとも急な事はないが、これが、坊主の本來の相なのだ。それよりも貴公は體を氣をつけてくれ。大望の事業を達成した後といふものは、誰しも落膽するものだ。髪の毛にも白いものが急に殖えて見えるからなあ」

窓の外で、立話をしたきりで、主水は飄然と先の旅へ去つた。

翌る朝は、夜の明けないうちから、津輕平の何十里に、笛太鼓の音が流れてゐた。初夏の薫風に白いつばさを擴げて、青田の上を白鷺が群遊してゐた。

五頭の荷駄に十樽の酒をつけ、一頭の馬には着を負はせ、他にも町の者や百姓達が、手車に何やら積んだり擔いだりして、五所川原から朝風の中を急いで來るのが聽て見える——

祭り囃子の一組が、それに交じつて、景氣をつけた。馬の鈴までがすばらしくりんと今朝はよく鳴るのだ。

「お珠さんに乗せてゆけ。與右衛門様のお嬢様をこゝからお祭りしてゆけ」

群衆は、御幣を立て、曳いてゐた飾り馬の背へ、無理に彼女を乗せて囃し立てた。

麓の役所には、ほかの村々からも、もう何百人もの人々が集まつてゐて、

「わし等與右衛門様の前へ、何と云つて出る面あるべえ。あんなお方を怨んだり悪く云つたり、面目なうて、假面でも被らずば小屋へ行けぬわい」

口々に同じ事を云つてゐた。

馬の背のお珠を迎へると、彼等は、

「お嬢様あつ……與右衛門様のお嬢様あ……」

たゞそれだけの事しか云へなかつたが、手を振り足を踊らせて歡呼した。

「與右衛門様が、酒下さつた、さあ飲めや。おゆるしを待たいても、與右衛門様はおら達の親ぢや、親の酒ぢや、いたゞいて一囃子こゝで囃して登らうぞ」

狂喜の人々の上に、薫ばしい酒の香がながれ、踊り出す者を見ると、笛は笛を吹き、太鼓は太鼓をたゞき——その者達も又吹きながら叩きながら踊り出した。

「——變だぞ、お嬢さん！早く御座らつしやれ」

上の方で、突然誰か叫んだ。見ると、道化面を被つて先に登つて行つた者、それを抛り捨て、

「小屋の戸が閉まつてゐる儘でねえか。——今頃迄、與右衛門様にないこつちや」

誰よりも早かつたのは、お珠の轉ぶやうに駆けてゆく姿だつた。それに續いて、群集の中から幾人か蹴つまづきながら飛んで行つた。

慌しく戸を外された小屋の中へ、けふも澄みきつた空の光と青田一萬石を越えてくる風がさつと入つた。

「——あれつ、お父さまつ！……お、おとう様めッ」

お珠は、父の體にしがみついて、聲かぎりの泣き聲を投げつけた。

一六

棟方與右衛門は、一室の中央に、何もかも覺悟の上らしく、整然と片づけた中に腹を切つて俯つ伏してゐた。

——彼はかすかに顔を揺るがした。苦しげな息とも聞えないがもう弱々しかつた。

「……お珠、た、たれか、百姓衆のうち、主立つた者に、そこ迄、來てもらつてくれ」

「來てをります。……お父様、縁先にも……うしろにも、村々の年寄たちが」

「さうか。……各々、百十ヶ村の百姓衆に代つて、聞いてくれ。遺書にも認めておいたが、五ヶ年の年月、さだめしこの與右衛門の苛酷を怨んでゐたであらう。鞭で人の子を打つた、人の親を打つた、又敢なく幾多の精靈を犠牲にいたした。この與右衛門の罪は大きい。何で、その村々の者からわしがけふの祭りの馳走になれよう。……それは御領主にさしあげてくれ。又おぬし達の氏神様へさし上げてくれ。あとは、おまへ達自身が欣べ」

弱い息づかひが炎のやうに急いで來た。

「人をさんざん鞭打つたわしは、最後に、その鞭を自分へ打つ日が来た。……當りまへなことだ。……濟まなかつたなうみんな、わしは泣きながらおまへ達の子や親を鞭で打つて来たが、謝まるぞ……謝まるぞ……わしの爲にしたのぢやない勘辨してくれい」

それで、彼の氣持は盡したらしかつたが、まだ、微かに何か悶へてゐたと思ふと、膝の下から一通の遺書を出して、

「お珠……お珠……」と、二度云つた。

彼女が、やつと答へると、その遺書を手に握らせて、

「これを持つて、おまへは、安太郎殿のところへ使にゆけ。……こゝにゐる村々の年寄に連れて行つてもらふが、いゝ……。よいか、おまへには、ただ、こゝこれだ……」

血しほの手から、その遺書をポロリと落して、わが娘へ掌を合せるとがくりつと棟方與右衛門はその儘となつた。

遺書の宛名は、十川安太郎御父子殿――

お珠と安太郎の婚禮の式は、與右衛門の喪中であるに拘らず、其秋、新田一萬石の初刈入が済むとすく、大きな民衆の力で執り行はれ、三日三晩、眞實そのもの、慶賀を送られた。

(南文協家蔵)
7150157號



昭和十七年七月二十日 初版印刷
昭和十七年七月三十日 初版發行

〔五〇、〇〇〇部〕

吉川英治自選集	定價金九拾錢
著者	吉川英治
發行者	多木壽一 東京市神田區美土代町二六番地
印刷者	(東東四三三) 西川喜右衛門 東京市神田區小川町二ノ一二
發行所	東京市神田區美土代町二六番地 輝文堂書房 (會員番號 一〇七〇二九番) 電話神田(25) 一、六七二番 銀座口座東京 一八、五三九二番
配給元	日本出版配給株式會社

(副印社英秀社會式株)

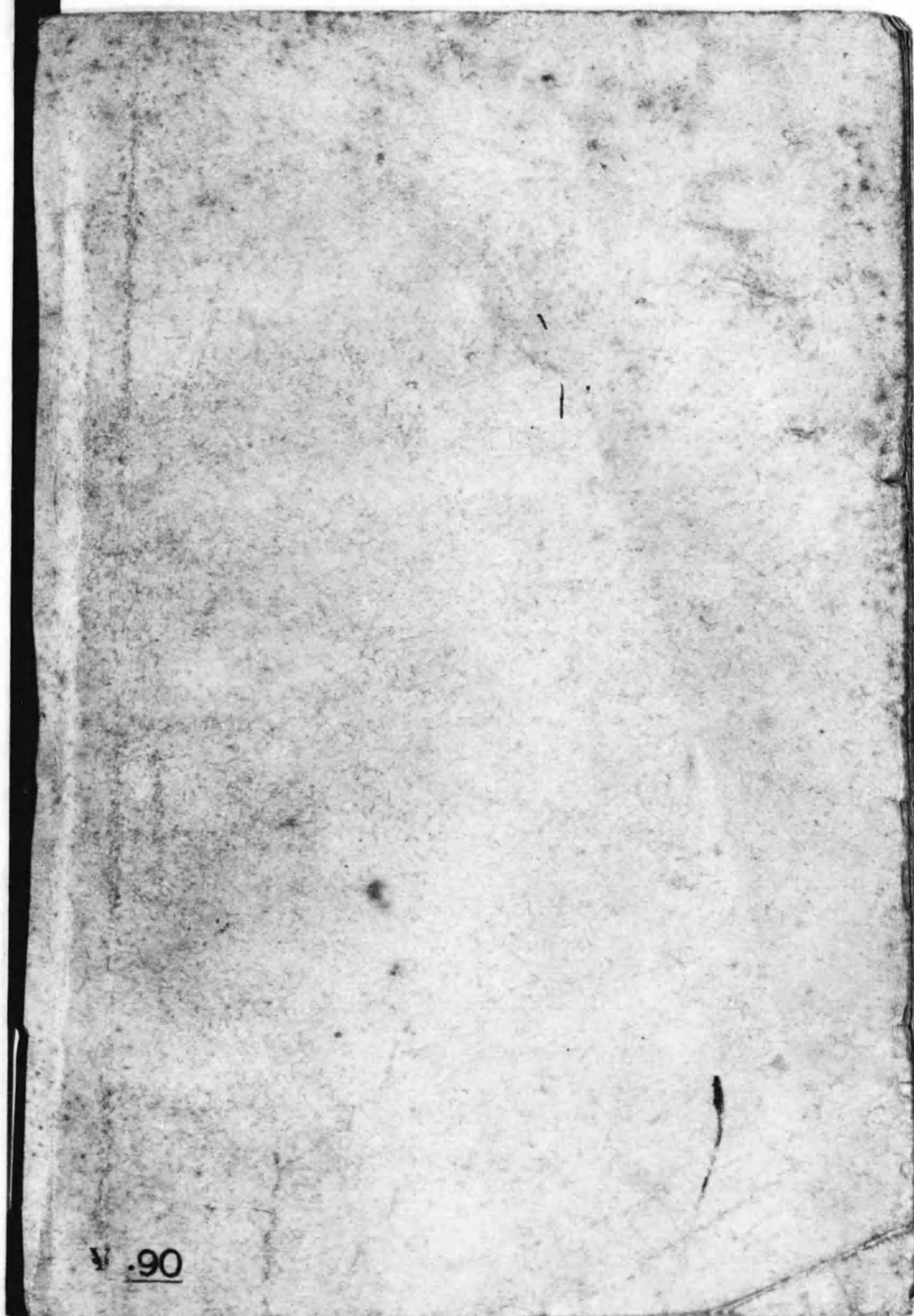
420
203

輝文堂版讀切小説

白井喬二自選集	樂川庄八・相馬大作・照根利次 郎・風流刺客・平手造酒	B六判 送料	金二九〇 五〇錢
子母澤寛自選集	天保二人飛脚・大村鐵太郎・海 棠念んな・新太五郎船	B六判 送料	金二九〇 五〇錢
村松梢風自選集	清水の小政・天保明花仙・新編 櫻標鎧・義經武士	B六判 送料	金八三〇 五五錢
鷺尾雨工自選集	妖歌・東半蔵・源五郎六の情・ 長久手合戦・城井の千代姫・天 正日本人の南進他二篇	B六判 送料	金八三〇 五五錢
土師清二自選集	久坂玄瑞・あづき治兵衛・風流 書	B六判 送料	金八三〇 五五錢
額田六福自選集	正身親世書・天下築・儲五父子 神形人形・武士の一踏・二枚鎧	B六判 送料	金八三〇 五五錢
吉川英治自選集	東鑑ざくら・玉堂琴士・飢え丸 類縁・悲願の旗・べんがら	近刊	
佐々木邦自選集		近刊	
矢田挿雲自選集		近刊	

420

終



90